

雄方後遺跡

— 一般国道 210 号田原拡幅事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2012

大分県教育庁埋蔵文化財センター

序 文

本書は、大分県教育委員会が国土交通省大分河川国道事務所の依頼を受けて実施した一般国道210号田原拡幅事業に伴う雄方後遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書です。

遺跡の所在する大分市は、古代には、豊後国分寺跡が設置され、中世には、九州に覇を唱えた大友氏の城下町である中世大友府内町跡が所在するなど、豊後国の中核を担う地域でもありました。

雄方後遺跡の調査では、中世を中心とした集落跡が確認でき、近年、周辺が発掘調査の成果と合わせて本地域における中世の社会を理解する上で貴重な発見が得られました。本書が埋蔵文化財に対する保護や啓発、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、この発掘調査に多大な御支援と御協力いただきました関係各位に対して衷心から感謝申し上げます。

平成24年3月30日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所 長 山 口 博 文

例 言

- 1 本書は一般国道210号田原拡幅事業に伴い、大分県教育委員会が国土交通省大分河川国道事務所の依頼により実施した大分県大分市大字田原字雄方・後に所在する雄方後遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、大分県教育庁埋蔵文化財センター職員の管理のもと、平成20年度は明大工業株式会社に、平成21年度は有限会社九州文化財リサーチに、平成22年度は株式会社九州文化財総合研究所にそれぞれ委託して実施した。
なお、本報告書では、それぞれ第1次調査区（平成20年度）、第2次調査区（平成21年度）、第3次調査区（平成22年度）として報告する。
- 3 整理作業は、大分県教育庁埋蔵文化財センター職員の管理のもと、平成21年度に九州文化財総合研究所株式会社、平成22年度に九州文化財総合研究所株式会社にそれぞれ委託して実施した。
- 4 遺物の写真撮影は小柳和宏・原田昭一・越智淳平が行った。
- 5 本遺跡出土遺物、実測図、写真はすべて大分県教育庁埋蔵文化財センターに保管されている。
- 6 本書の執筆は、小柳和宏・原田昭一・越智淳平が行い、編集は原田が行なった。

目 次

序文・例言

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査組織の構成	1

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2

第3章 調査の成果

第1節 1次調査区	5
1 調査の概要	5
2 層序	7
3 遺構と遺物	7
1) 掘立柱建物	8
2) 橋跡	12
3) 溝	12
4) 土坑	19
5) ビット	21
6) 遺構外出土遺物	23
4 小結	24
第2節 2次調査区	28
1 調査の概要	28
2 層序	29
3 遺構と遺物	33
1) 溝	33
2) 道跡	39
3) 水田	41
4) その他の出土遺物	43
4 自然化学分析	44
1) 植物珪酸体(プラント・オパール)分析	44
2) 花粉分析	49
5 小結	52
第3節 3次調査区	55
1 調査の概要	57
2 遺構と遺物	57
1) 井戸	57
2) 掘立柱建物	61
3) 橋跡	64

4) ビット	65
5) 遺構外出土遺物	65
3 小結	66
第4章 総括	67

写真図版

報告書抄録

図版目次

第1図	雄方後遺跡と周辺の歴史的環境	3	第50図	2次調査区S-1000出土遺物	41
第2図	雄方後遺跡調査区位置図	4	第51図	2次調査区27層(水田層)広がり	42
第3図	1次調査区東区南壁土層断面図	5	第52図	2次調査区27層出土遺物	42
第4図	1次調査区遺構配置図	6	第53図	2次調査区その他の出土遺物	43
第5図	1次調査区東区遺構配置図	7	第54図	2次調査1区における 植物珪酸体分析結果	47
第6図	1次調査区西区遺構配置図	8	第55図	3次調査区遺構配置図	55~56
第7図	1次調査区SB1048実測図	9	第56図	3次調査区SE010断面図	57
第8図	1次調査区SB1048出土遺物実測図	10	第57図	3次調査区SE010出土遺物図	58
第9図	1次調査区SB1049実測図	11	第58図	3次調査区SE015出土遺物図	58
第10図	1次調査区SB1049出土遺物実測図	12	第59図	3次調査区SE015	59~60
第11図	1次調査区SB2036実測図	13	第60図	3次調査区SB016	61
第12図	1次調査区SB2036出土遺物実測図①	13	第61図	3次調査区SB017	62
第13図	1次調査区SB2036出土遺物実測図②	14	第62図	3次調査区SB018	63
第14図	1次調査区SB2037実測図	15	第63図	3次調査区SA019	64
第15図	1次調査区SB2037出土遺物実測図	15	第64図	3次調査区SA020	64
第16図	1次調査区SB2038実測図	16	第65図	3次調査区SA021	65
第17図	1次調査区SB2039実測図	16	第66図	3次調査区ビット出土遺物	65
第18図	1次調査区SB2039出土遺物実測図	16	第67図	3次調査区出土遺物	65
第19図	1次調査区SD1040・1046実測図	17	第68図	大分市大字田原地区における 歴史的環境	67
第20図	1次調査区SD1040出土遺物実測図	17	第69図	大分市田原横越寺所在石塔部材	68
第21図	1次調査区SD2012実測図	18			
第22図	1次調査区SD2012出土遺物実測図	18			
第23図	1次調査区SD2001実測図	18			
第24図	1次調査区SD2001出土遺物実測図	18			
第25図	1次調査区SD2022実測図	19			
第26図	1次調査区SD2022出土遺物実測図	19			
第27図	1次調査区SD1018実測図	20			
第28図	1次調査区SD1018・1023出土遺物実測図	21			
第29図	1次調査区SD1009・SK1010実測図	21			
第30図	1次調査区SK1010出土遺物実測図	21			
第31図	1次調査区SK2035実測図	22			
第32図	1次調査区SK2035出土遺物実測図	22			
第33図	1次調査区柱穴実測図	22			
第34図	1次調査区SP1002実測図	23			
第35図	1次調査区包含層 その他出土遺物実測図	23			
第36図	1次調査区西区遺構変遷図	25			
第37図	明治33年作製地形図における 1次調査区と周辺の様相	26			
第38図	2次調査区位置図	28			
第39図	2次調査区第Ⅰ区平面図	29			
第40図	2次調査区第Ⅱ区遺構配置図	30			
第41図	2次調査区第Ⅰ区南壁土層図	31			
第42図	2次調査区第Ⅱ区土層図	32			
第43図	2次調査区S-3、S-132	34			
第44図	2次調査区S-64	35			
第45図	2次調査区S-131	37			
第46図	2次調査区S-133	38			
第47図	2次調査区S-60、S-61、S-130、S-4	39			
第48図	2次調査区S-1000、S-137	40			
第49図	2次調査区S-3出土遺物	40			

写真図版目次

図版1	雄方後遺跡遠景(南から)	71	1次調査区SP2012木材検出・SP2020完掘状況	
図版2	1次調査区全景(南より)・1次調査区全景(南より)	72	1次調査区SP2014・2015柱出土状況	82
図版3	1次調査区1区遺構検出状況(西より)		図版13	1次調査区出土遺物
1次調査区1区完掘状況(西より)	73	図版14	2次調査区空中写真(東から)	
図版4	1次調査区1区南壁土層・1次調査区1区東壁土層		2次調査区空中写真(西から)	84
1次調査区SD1018石列検出状況(西より)	74	図版15	2次調査区Ⅱ区西側空中写真	
図版5	1次調査区SD1018土層断面(西より)		2次調査区Ⅱ区東側空中写真	85
1次調査区SD1018完掘状況(西より)		図版16	2次調査区Ⅱ区東側(西から)	
1次調査区SD1021遺物出土状況(北より)		2次調査区Ⅱ区東側(東から)	86	
1次調査区SD1004土層断面		図版17	2次調査区Ⅱ区西側(西から)	
1次調査区SP1002土層断面		2次調査区Ⅱ区西側(西から)	87	
1次調査区SP1002柱出土状況		図版18	2次調査S-3・2次調査S-3	
1次調査区SP1029柱出土状況		2次調査S-3土層断面		
1次調査区1区西側トレンチ土層断面	75	2次調査S-132・2次調査S-32土層断面		
図版6	1次調査区2区遺構検出状況(東より)		2次調査S-64・2次調査S-64土層断面	
1次調査区2区完掘状況(東より)	76	2次調査S-131	88	
図版7	1次調査SB2036・SB2037完掘状況(東より)		図版19	2次調査S-131土層断面・2次調査S-133
1次調査区2区南壁土層(北より)		2次調査S-133土層断面・2次調査S-1000(西から)		
1次調査区2区南壁土層		2次調査S-1000(東から)		
(AD1040付近スポット)	77	2次調査S-1000土層断面		
図版8	1次調査区SD1040完掘状況(東より)		2次調査S-1000・2次調査S-64検出状況	89
1次調査区SD1040遺物出土状況		図版20	2次調査区出土遺物	90
1次調査区SP1031(下)・1032(右)遺物出土状況		図版21	3次調査区西区全景・3次調査区東区全景	91
1次調査区SP1031遺物出土状況		図版22	3次調査区SE010掘削状況	
1次調査区SP1033土層断面・1次調査区SP1037土層断面		3次調査区SE010完掘状況		
1次調査区SP1032遺物出土状況		3次調査区SE010土層断面	92	
1次調査区SP1039柱出土状況	78	図版23	3次調査区SE015検出状況	
図版9	1次調査区3区遺構検出状況(南東より)		3次調査区SE015掘削状況	
1次調査区3区完掘状況(真上より)	79	3次調査区SE015遺物出土状況	93	
図版10	1次調査区SA2038完掘状況(西より)		図版24	3次調査区SE015足場木組検出状況(南西から)
1次調査区3区東側黒色土落込み状況		3次調査区SE015足場木組検出状況(北東から)		
1次調査区SP2024柱出土状況		3次調査区SE015足場木組検出状況(南東から)	94	
1次調査区暗渠上石列検出状況		図版25	3次調査区SE015土層断面(北西から)	
1次調査区暗渠下水材検出状況	80	3次調査区SE015完掘状況(南西から)	95	
図版11	1次調査区4区遺構検出状況(南西より)		図版26	3次調査区出土遺物
1次調査区4区完掘状況(南西より)	81			
図版12	1次調査区SB2036・SB2037・SA2039完掘状況(南より)			
1次調査区SD2001完掘状況(西より)				
1次調査区SD2001遺物出土状況				

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

雄方後遺跡は大分市大字田原に所在する。遺跡の所在する大分市は大分県の中部に位置し、近年の市町村合併により隣接する野津原町・佐賀関町を併せて新たな大分市としてスタートした。

一般国道210号田原拉幅事業は大分市の南部である種田地区から大分市の西部である狭間地区へ抜ける幹線道路として利用されており、多くの車両が通行する。しかし、原道は2車線が確保されているものの、恒常的な渋滞や、歩道の未確保、大型車両の通行に支障をきたす等、様々な問題を抱えていた。そこで国土交通省大分河川国道事務所は地域住民の生活の利便性をはかるために一般国道210号の改良工事を実施することとなった。

大分県教育委員会は雄方後遺跡において用地取得後、順次、試掘調査を実施し、遺構・遺物が確認された場所については、記録保存のための本調査を平成20年度～平成22年度の間に実施した。また、発掘調査終了後、平成21年度～平成23年度、遺物整理作業を行い、報告書を刊行するに至った。

第2節 調査組織の構成

調査主体 大分県教育委員会

発掘調査体制

【平成20年度】	佐藤英一	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長	
	坂本嘉弘	同	次長兼調査第一課長
	栗田勝弘	同	調査第二課課長
	越智淳平（調査担当）	同	調査第二課受託事業担当主事
【平成21年度】	佐藤英一	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長	
	坂本嘉弘	同	次長
	小林昭彦	同	課長補佐（総括）
	小柳和宏（調査担当）	同	受託事業班主幹（総括）
【平成22年度】	山口博文	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長	
	坂本嘉弘	同	次長
	小柳和宏	同	受託事業班主幹（総括）
	原田昭一（調査担当）	同	受託事業班主幹
整理作業体制			
【平成21年度】	佐藤英一	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長	
	坂本嘉弘	同	次長
	小林昭彦	同	課長補佐（総括）
	越智淳平（調査担当）	同	受託事業班主事
【平成22年度】	山口博文	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長	
	坂本嘉弘	同	次長
	小柳和宏（調査担当）	同	受託事業班主幹（総括）
	越智淳平	同	受託事業班主事
【平成23年度】	小矢文則	大分県教育委員会教育長	
	山口博文	大分県教育庁埋蔵文化財センター所長	
	坂本嘉弘	同	次長
	小柳和宏	同	受託事業班課長補佐（総括）
	原田昭一（調査担当）	同	受託事業担当主幹

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

九州の東部に位置する大分県は、山がちで山地に規制され、小平野ごとに地域性を有する、特徴的な地理的環境下にある。雄方後遺跡が所在する大分市大字田原は、大分市の西部に位置し、西側は由布市挾岡町に、南側は大分市野津原町に接している。田原地区は大分川中流域にあたり、東～南側を木ノ上台地・雄城台・下芹丘陵に挟まれている。同地区の集落は川の右岸に形成された沖積平野上の微高地と下芹丘陵の北側裾に展開している。

雄方後遺跡の立地する箇所は、下芹丘陵が北側に広がる裾部である。現在の田原地区の集落では、ほぼ中心に位置するが、自然地形や明治33年製地形図を参考にすると、集落の北端にあたる。雄方後遺跡を営んだ人々は複雑な微地形の中で乾燥した場所を選んだものと考えられる。

第2節 歴史的環境

雄方後遺跡の所在する大分市西部では、旧石器時代から縄文時代中期での顕著な遺跡は確認されていないが、雄城台遺跡や植田市遺跡から旧石器が採集されている。縄文時代後期～晩期になると、植田市遺跡や山田伏遺跡、玉沢条理地区跡で当該期の遺物包含層や土坑が確認されている。

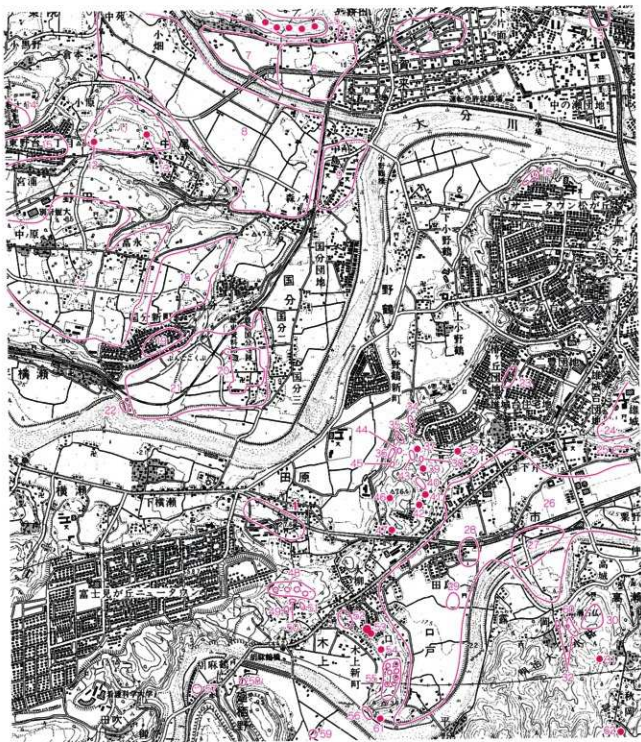
弥生時代には、巴形銅器や多数の甕棺墓が確認されたことで著名な雄城台遺跡が存在し、当地における拠点的な集落として前期末から終末期にわたって継続して営まれている。

古墳時代になると、それまで台地に築かれていた集落がなくなり、変わって沖積平野に営まれるようになる。前期には植田条里跡で堅穴建物跡や溝状遺構が、玉沢条里跡では前期と後期の水田跡と水田に伴う畦畔遺構等が確認されている。また、古墳の造営も活発に行われるようになる。前期に遡る古墳は確認されていないが、中期には周辺に盟主的な古墳として御陵古墳が築かれている。御陵古墳は全長75m以上で2段築成の前方後円墳であり、箱式石棺を主体部に持ち、円筒埴輪が使用されている。同時期の古墳には下ヶ迫古墳や世利門古墳、浅草神社古墳群・高来山横穴墓群1号墓がある。後期になると、丘陵斜面や崖面に横穴墓が多数築かれるようになり、高来山横穴墓群・大曾根横穴墓群・漆岡横穴墓群をはじめとして枚挙に暇がない。

律令制の敷かれた奈良時代には豊後国大分郡に属しており、平安時代には同郡植田郷となっている(「和名抄」)。当該期の遺跡としては玉沢条里跡がある。

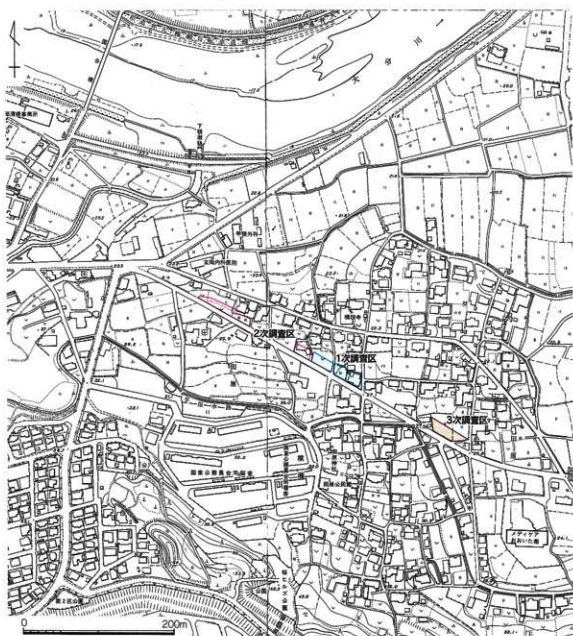
中世には、「植田荘」と呼ばれる荘園が成立しており、玉沢条里跡から水田遺構・溝状遺構が確認されている。雄方後遺跡では1次調査区から溝状遺構、3次調査区から井戸等が確認されているが、今回の発掘調査箇所は地形等から南側の丘陵に広がる集落の末端と考えられる。また、田原神社には、伝大友親治墓という大型の五輪塔や中～小型の五輪塔が多数存在する。横超寺には応永20年(1413)と記年銘のある五輪塔がある。それ以外にも宝篋印塔の残欠などが点在している。

近世になると、府内藩領・臼杵藩領・延岡藩領が混在する地区となる。雄方後遺跡1次調査区では掘立柱建物確認されている。また、慶安5(1651)年の古井路の改修、享保10～12(1725～1727)年の享保井路・嘉永元～3(1847～1849)年の嘉永井路の築造があり、享保井路の記念碑が山麓で確認される。(越智淳平)



- | | | | |
|-----------------|------------------|-------------------|-----------------------|
| 1 雄方後遺跡 (中世) | 17 野田遺跡 (旧石器) | 33 下道古墳 (古墳) | 49 志土地横穴墓群 (古墳) |
| 2 上片園遺跡 (縄文) | 18 四分台遺跡 (縄文) | 34 大曾横穴墓群 (古墳) | 50 木ノ上野横穴墓群 (古墳) |
| 3 藤杉下遺跡 (縄文) | 19 六重遺跡 (縄文) | 35 大曾2横穴墓群 (古墳) | 51 土塚横穴墓群 (古墳) |
| 4 藤田横穴墓群 (古墳) | 20 豊後園分寺跡 (古代) | 36 大曾3横穴墓群 (古墳) | 52 木ノ上古墓石祠 (古墳) |
| 5 藤田古墳群 (古墳) | 21 園分遺跡 (古代) | 37 六部塚古墳 (古墳) | 53 新藤古墳 (古墳) |
| 6 買米遺跡 (弥生) | 22 錦ヶ原遺跡 (中世) | 38 高木山第2横穴墓群 (古墳) | 54 千人塚 (中世) |
| 7 買米井ノ口遺跡 (弥生) | 23 錦ヶ元横穴墓群 (古墳) | 39 鹿野古墳 (古墳) | 55 浅草神社古墳群 (古墳) |
| 8 買米桑屋跡 (古代) | 24 雄城台遺跡 (弥生) | 40 高木山横穴墓群 (古墳) | 56 岩崎横穴墓群 (古墳) |
| 9 買米中学校遺跡 (弥生) | 25 雄城台下横穴墓群 (弥生) | 41 藤岡古墳 (古墳) | 57 熊崎石造宝篋印塔 (中世) |
| 10 小原横穴墓 (古墳) | 26 玉沢地区集落跡 (弥生) | 42 豊門古墳 (古墳) | 58 角家石造宝篋・五輪塔 (中世) |
| 11 中尾遺跡 (古墳) | 27 藤田古墳群 (弥生) | 43 藤岡横穴墓群 (古墳) | 59 青倉家石造宝篋印塔・五輪塔 (中世) |
| 12 中尾古墳2号墳 (古墳) | 28 ガラシ遺跡 (弥生) | 44 小藤遺跡 (古墳) | 60 高瀬石仏 (国史跡) |
| 13 中尾古墳 (古墳) | 29 安川原古墳群 (近世) | 45 高木山第3横穴墓群 (古墳) | 61 口戸磨崖仏 (国史跡) |
| 14 下野野遺跡 (旧石器) | 30 高城山城跡 (中世) | 46 大曾軍古墳 (古墳) | 62 大友副墓 (市史跡) |
| 15 野田山遺跡 (旧石器) | 31 高瀬古墳 (古墳) | 47 藤岡古墳 (古墳) | |
| 16 小野崎横穴墓群 (古墳) | 32 高瀬横穴墓群 (古墳) | 48 山伏古墳群 (古墳) | |

第1図 雄方後遺跡と周辺の歴史的環境(1/25,000)



第2図 雄方後遺跡調査区位置図(1/5,000)

第3章 調査の成果

第1節 1次調査区

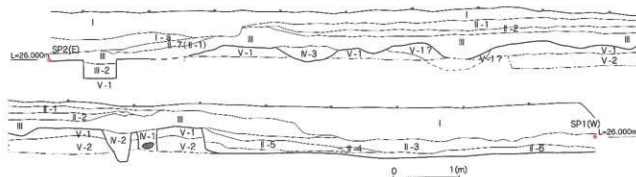
1 調査の概要

試掘調査は、宅地であった箇所はコンクリートの基礎を除去後、畑であった箇所はそのままバックホウで表土除去を行った。その後、黒色粘質土、旧水田層の下の灰黄褐色砂質土（地山）の上面で柱穴・土坑・溝を検出し、中近世の土器を確認した。その結果、中世～近世の集落であり、本調査が必要と判断した。

本調査は、里道と水路保全の観点から東区と西区にわけて調査区を設定した。さらに、排土を調査区外に持ち出すことができないことから、東区を1・2区、西区を3・4区と分割して、切返しながら調査を実施した。調査は、表土・旧水田層をバックホウで除去した後、整地層以下を人力で掘り下げて地山上面で遺構検出を行った。その後、順次遺構の掘り下げを行った。

東区は、L字状を呈する調査区である。東壁より5～6mの範囲で遺構検出レベルでも暗褐色砂質土が確認され、遺構が検出できなかった。そのためトレンチ調査を行ったところ、地山が東側へ大きく下がっていく状況を確認した。ただし、SD1001とSD1018は、暗褐色砂質土中から確認されたため、遺構の形成時には後述する西区の落ち込み同様の時期には堆積していた可能性が高い。西区は調査区西側を流れる水路が調査区内でL字状に折れているため、方形と北西の三角形の箇所とに分かれている。基本的な層序は東区と同様である。東区と大きく異なる点は、調査区東側の幅4.5～5mで黒色粘質土が堆積していることである。トレンチ調査の結果、断面は逆台形をしており、深さ1.5mの南北に延びる自然の落ち込みに堆積した埋土と判断した。遺物は確認されていないが、SK2035より古いことから、中世末～近世前半までに堆積したと考えられる。遺構は、主に東区の西半と西区中央で溝・掘立柱建物跡、槽列が確認された。

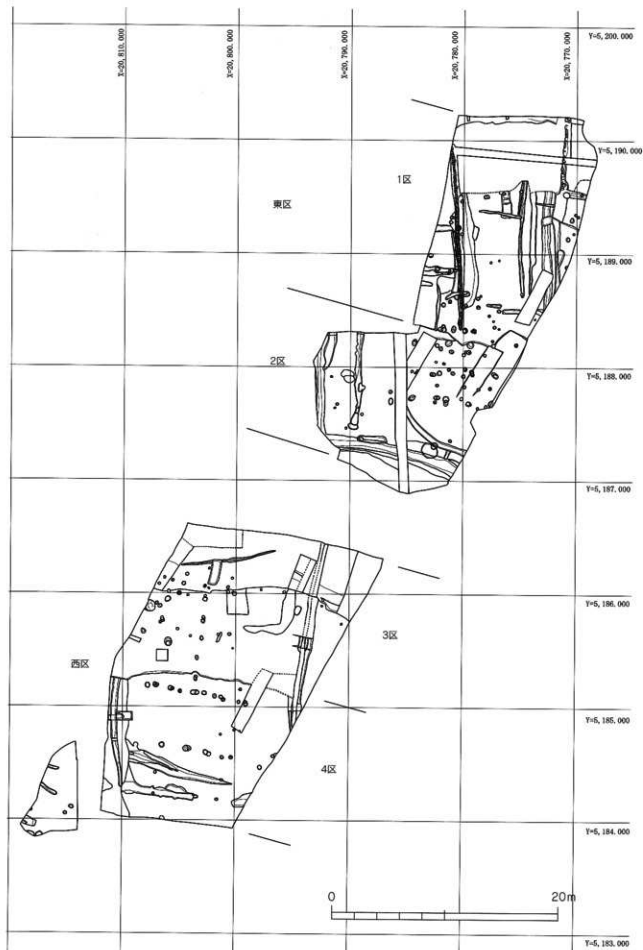
なお、遺構の番号は、遺構の大小・性格にこだわらず、確認された順に番号をつけていった。また、調査の便宜上、東区（1・2区）の遺構をS1001から西区（3・4区）の遺構をS2001から開始し、調査後に遺構の性格を決定した。



1区 南壁セクション

	階層	特徴	色	土質	レン	その他
	I	表土	黒灰 (7.5YR3/2)	粘～粘質土	φ30cm以下	ほとんどなく含む
		埋土	黒 (10YR2/6)	粘～シルト	φ30cm以下のレンを多く含む	
		溝	黒 (10YR2/1)	粘～シルト	φ30cm以下のレンをまばらに含む	底を改修
I層	II-1	水田	黄灰 (2.5Y5/1～4/1)	砂質土	φ30cm以下のレンをまばらに含む	
I-a層	II-2	床土	黄灰 (2.5Y5/1)	砂質土	暗褐色色片φ1cm以下をやや含む	底を改修
	II-3	水田	黄灰 (2.5Y5/1)	砂質土	φ1cm まばら	水酸化あり
	II-4	水田砂質土	黄灰 (10YR4/1)	粘質～砂質土	φ1cm まばら	II-1と同質
II層	II-5	水田保土層	黄灰 (7.5Y4/1)	粘質土	φ1cm まばら	
III層	II-6	床土	黄灰 (2.5Y5/1)	砂質～粘質土	φ1cm まばら	褐色に水酸化した部分を含む
	II-7	水田	黄灰 (2.5Y4/1)	砂質～粘質土	φ1cm まばら	
IV層	III	掘立柱	黒灰 (10YR2/2)	粘質～粘質土	φ1cm まばら	水田の埋土層もあり
V層	N-1	ピット埋土	灰黄褐 (10YR4/2)	砂質土	φ3cm 含む	褐色部分あり
	N-2	ピット埋土	黄灰 (10YR4/1)	粘質～砂質土	φ3cm まばら	20%程度地山の土を含む
	N-3	溝埋土	黄灰 (2.5Y5/1)	粘質～砂質土	φ3cm まばら	
	V-1	地山	灰黄褐 (10YR2/2)～ に丸 黄褐 (10YR5/2)	砂質土～砂	φ3cm まばら	部分の改修・上層の灰色土がまじる
	V-2	地山	灰黄褐 (10YR5/2)	砂質～砂質土	φ3cm まばら	V-1より底の位置が高い
	V-1	掘立柱	黒 (10YR2/2)	V-1と同質	φ3cm ほとんどなく含む	
	II-2	埋土	黒灰 (10YR2/2)	粘質土	φ1cmのみ含む	

第3図 1次調査区東区南壁土層断面図 (S=1/40)



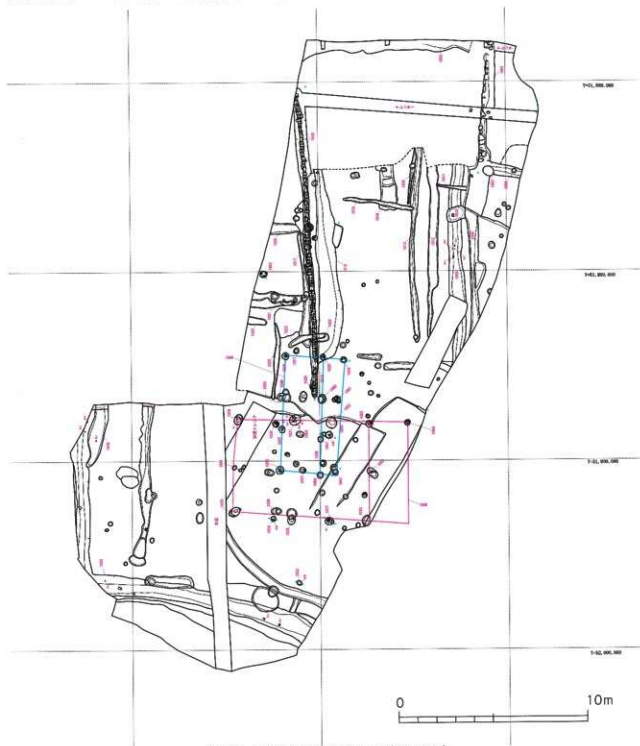
第4図 1次調査区遺構配置図(S=1/300)

2 層序

当遺跡の基本層序は、Ⅰ～Ⅴ層からなる。Ⅰ層は、現在の表土・耕作土であり、Ⅰ区では、下部のⅠ-a層より近代（明治時代）の遺物を包含する層が確認された。Ⅱ層は、旧水田層である。Ⅲ層は、暗褐色粘質土で、製地層の可能性がある。Ⅳ層は遺構埋土である。Ⅴ層は、地山で灰黄褐色砂質土からなる。

3 遺構と遺物

雄方後遺跡1次調査区では、調査の概要で述べたとおり、掘立柱建物跡・横列・溝・土坑・畝に伴う溝状遺構・ピットが確認された。以下、遺構順に評述する。出土遺物はあまり多くないため図化可能なものや遺構の時期に係わるものについてはできるかぎり掲載するよう努めた。



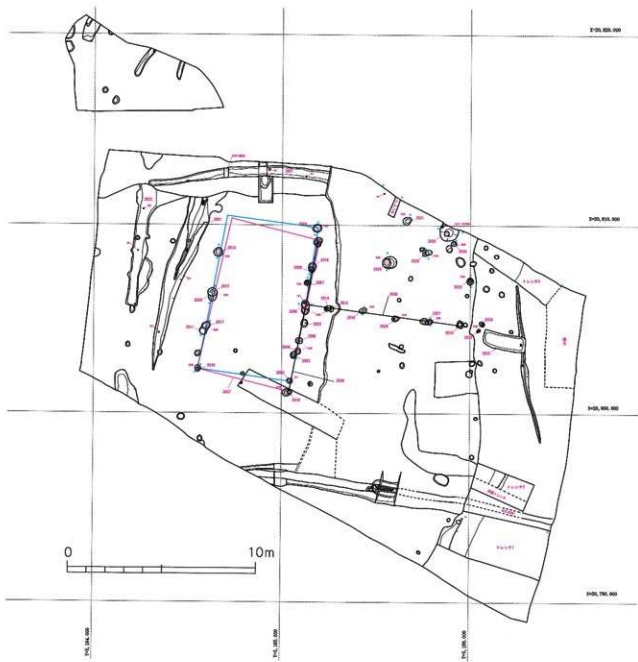
第5図 1次調査区東区遺構配置図(S=1/200)

1) 掘立柱建物

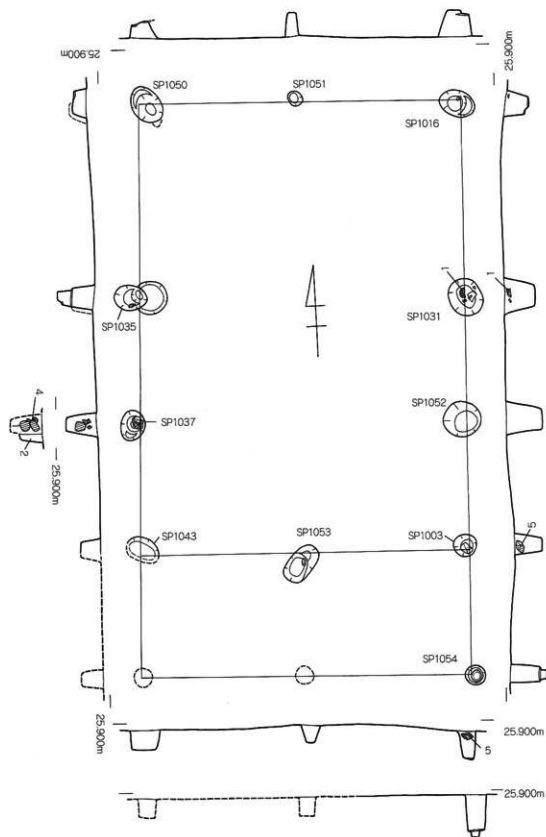
1次調査区では、東区からSB1048・SB1049の2棟、西区からSB2036・SB2037の2棟の掘立柱建物が確認された。いずれもV層上面から検出されている。

SB1048(第7,8図、写真図版6、7、12)

SB1048は、東区中央で検出された掘立柱建物で南北9.2m、東西5.3mを測る。柱間では、南北4間、東西2間の南北棟である。なお、南側のピット2基については調査区外に延びており検出ができなかった。柱間は1.8~2mであるが、北から1間目が3mとほかに比べてやや広い。ピットはSP1016・SP1035・SP1037・SP1054が柱を据えるために2段掘りをしており、それ以外のものは断面台形を呈する。また、SP1016・SP1050は断面形状から柱を抜き取ったものと考えられる。直径は小さいものが0.3mで、大半が0.5~0.6mである。深さは0.3~0.7mを測る。SP1031は検出面から掘り下げたところで、1~3と磁器小片・石を検出した。青磁皿(1)は半截され、伏せられていたことから、意図的な廃棄が想定される。SP1037には石臼(4)と共に川原石が廃棄されていた。



第6図 1次調査区西区遺構配置図(S=1/200)



SP1037 1層柱痕 黄灰色粘質土
 2層埋土 褐灰~暗褐色粘質土



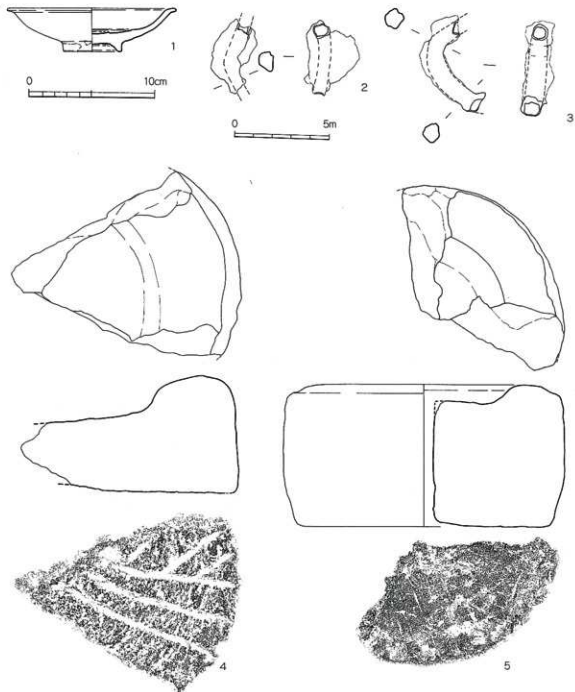
第7圖 1次調査区SB1048実測図(S=1/60)

出土遺物は第8図に示した。SP1031から1～3、SP1037から4、SP1003から5が出土した。1は、肥前系の青磁皿である。口縁部は端反りをし、高台の一部が露胎している。2・3は鉄器で直径10程度の環状もしくは楕円状をなすと考えられるが、種類は不明である。4・5は凝灰岩製の石臼(上臼)である。4は底面に磨り目が認められる。5は直径21.4cm、高さ11.2cmと4より小型であるが厚いものである。底面の磨り目は摩耗もしくは磨滅によりはっきりしない。

遺構の時期を示す遺物は1のみであるが、17世紀末～18世紀前半と考えられる。

SB1049(第9、10図、写真図版6、7、12)

SB1049は、東区中央で検出された掘立柱建物で、東西6.1m、南北3mである。柱間は、一部検出できなかつ



1～3:SP1031 4:SP1037 5:SP1003

第8図 1次調査区SB1048出土遺物実測図(1,4,5:S=1/3, 2,3:S=1/2)

た柱穴もあるが、東西3間、南北2間で、さらに南側に1間の庇がつくと考えられる。柱間は東西では2mであるが、南北は1mと狭いため南北は2間ではなく1間の可能性もある。庇の柱間も同様である。ピットの直径は0.3～0.5mで、深さは0.3～0.6mを測る。SP1004とSP1041からは土層断面の観察から柱痕が確認された。

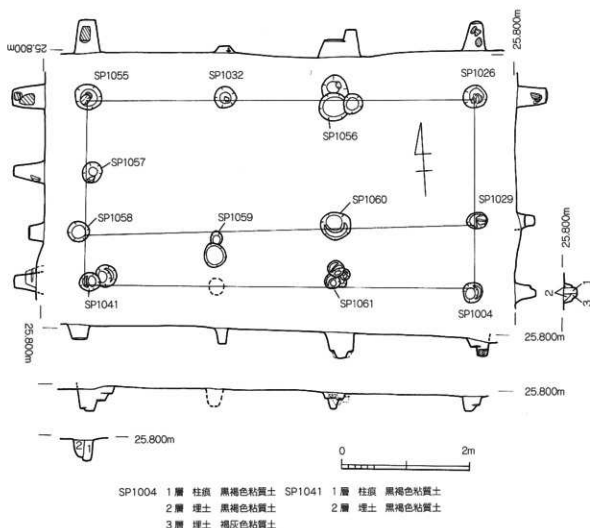
出土遺物は第10図に示した。SP1032から1・2、SP1029から3が確認された。1は灰黄褐色の陶磁器であるが、器種・産地とも不明である。2は、瓦質の火鉢口縁部で、外面に断面三角形の粘土帯が回る。3は、石臼（下臼）で、上面に磨面が認められる。

遺構の時期は、遺物が非常に少なく決定することが困難であるが、2は16世紀末～17世紀初頭であることから中世末～近世初頭としておく。

SB2036(第11～13図、写真図版11、12)

SB2036は西区中央に展開する掘立柱建物跡であり、ピット間の切り合いから後述するSB2037よりも古いことが確認される。建物跡は東西5m、南北8.3mである。一部検出できなかった柱穴もあるが、南北4間、東西2間の南北棟である。柱間は南北が2mであるのに比べ、東西は2.5mとやや広い。ピットの直径は0.4～0.5mのものが多いが、もっとも小さいものは0.2mである。深さは0.4～0.5mを測る。SP2005・SP2006・SP2009・SP2010・SP2013・SP2017の土層断面観察から柱痕が確認されている。

遺物は第12・13図に示した。土器は、SP2006から1の関西系陶器の鍋が1点確認されたのみである。SP2012からはクス?を使用した一木作りの筒状木製品が柱穴底面から検出された。当初は、柱の中心が腐ったことによるものとも想定された。取り上げたところ、下部にノミで削ったような工具痕が確認されたため、人工的に筒状



第9図 1次調査区SB1049実測図(S=1/60)

にした可能性も考えられる。ただし、種類・用途は不明である。なお、検出時には正円に近かったが保存処理を行った結果、樹種のため歪みが生じた。

遺物の時期は19世紀である。ただし、遺構の切り合いからSB2037より古いので、詳細な年代は不明であるが近世前半の遺構と考えられる。

SB2037(第14、15図、写真図版11、12)

SB2037は前述したSB2036を建て替えたと考えられる掘立柱建物であり、ほぼ全ての柱穴がSB2036の柱穴を切るか近接している。建物跡建物跡は東西5m、南北8.3mである。一部検出できなかった柱穴もあるが、南北4間、東西2間の南北棟で、柱間はSB2036とほぼ同じである。ただし、南北の柱間は2~2.2mで、北側の1間が1.8mとやや狭い。ピットの規模もSB2036と同様の特徴を示す。

出土遺物は第15図の1の肥前系磁器の徳利が1点出土したのみである。出土遺構はSP2020である。遺物は18世紀代の所産であるが、前述したSB2036より新しい近世の遺構であるとするに留める。

2) 櫓列

櫓列は、前述した掘立柱建物SB2036・SB2037中央付近から東側に展開するSA2038と掘立柱建物跡の東側柱穴列と同じ箇所にはSA2039の2つが確認された。

SA2038(第16図、写真図版9)

SA2038は、東西に延びる櫓列で全長7.5mである。4間からなり、柱間は1.8mである。ピットの直径は0.3~0.4mとSB2036に比べてやや小さい。深さは大半が0.3mであるが、SP2014のみ0.7mと深い。また、SP2014からは柱の木材が検出され、直径15cm、長さ35cm分が残存していた。SP2018・SP2027からは土層断面で柱裏が確認された。なお、SP2014とSP2015、SP2027の2箇所では柱穴が切り合っており、2回以上建て直された可能性もある。

遺物は確認されていないため時期は不明であるが、後述するSA2039~SB2037の時期に取まると考えられる。

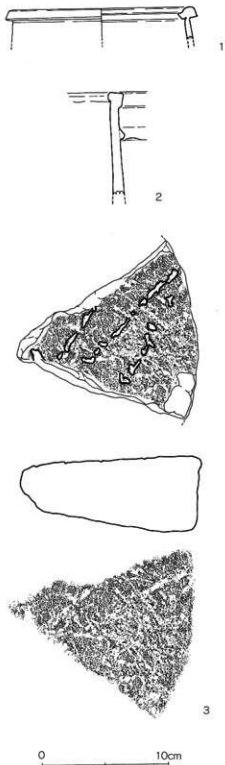
SA2039(第17、18図、写真図版11、12)

SA2039は、南北に延びる櫓列で、全長8.5mを測る。柱間は2mで、5間が確認された。ピットの直径は0.4m、深さは0.3mでSA2038とほぼ同じ規模を測る。SP2023以外のピットは柱を据えるために2段掘りとなっている。また、SP2007とSP2019からは土層断面で柱痕が確認された。

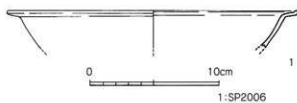
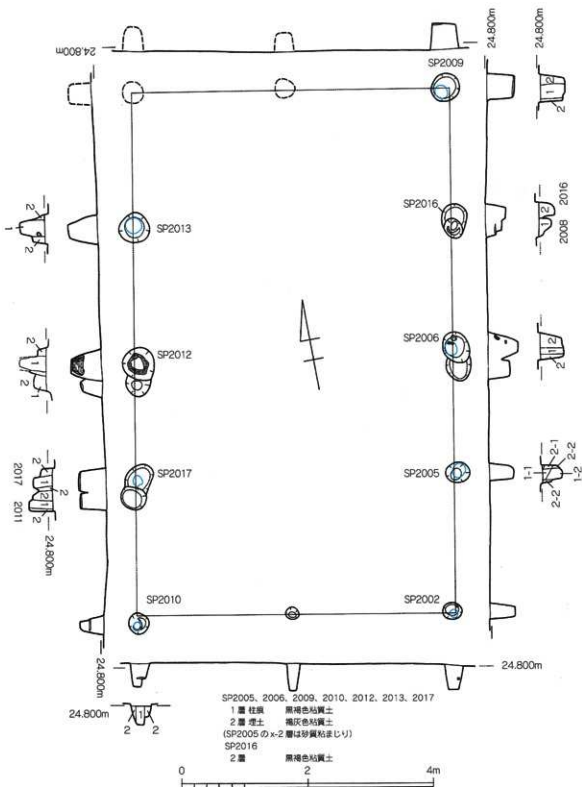
遺物はSP2003から漳州窯系磁器碗が1点確認されており、遺物の時期からは16世紀後半~末葉とできる。また、SP2008がSP2016に切られることから、SB2036よりも古いため、中世にさかのぼる可能性がある。

3) 溝

溝は大きく掘立柱建物跡や櫓列に伴う区画溝と考えられるものと水田化以前の畝の畝等の溝状遺構にわけられる。前者はSB2036・SB2037の西側のSD2021・SD2022がある。後者は東区の東半(1区)に集中している。また、SD1018のような暗渠が東西方向に3本走っており、西区の南側の暗渠は板材を組み合わせて使用していた。



第10図 1次調査区SB1049出土遺物実測図(S=1/3)



第12図 1次調査区SB2036出土遺物実測図①(S=1/3)

SD1040(第19、20図、写真図版7、12)

SD1040は東区の西端で確認されたL字状を呈する溝であり、東側と南側は調査区外に延びている。現状では長さが東西8m、南北13m、幅0.6～0.8mである。断面形は浅い皿状もしくは逆台形をしており、深さは0.2～0.3mである。なお、南端でテラス状の段が確認されている。SD1040の西側は現在水路となっている。さらに里道を隔てて、西区東側で確認された黒色粘質土を埋土とする自然の落ち込みもしくは溝状遺構と接することになる。

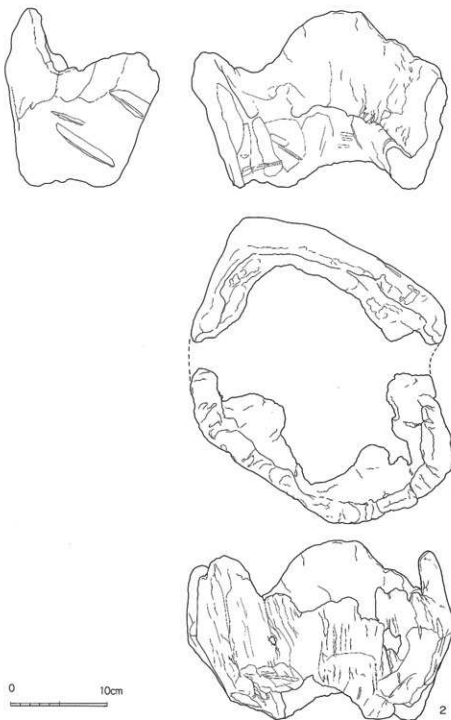
出土遺物は第20図に示した。1は唐津焼の皿で見込みに砂目痕が確認される。高台と底部は露胎している。2は肥前系の灰落として、外面は黄色と褐色がストライプ文様となっている。3は、肥前系磁器碗でこんやく印判が胴部中央に認められる。4はL字状を呈する鉄器である。

遺構の時期は、3より17世紀末～18世紀前半であると考えられる。

SD2021(第21、22図、写真図版12)

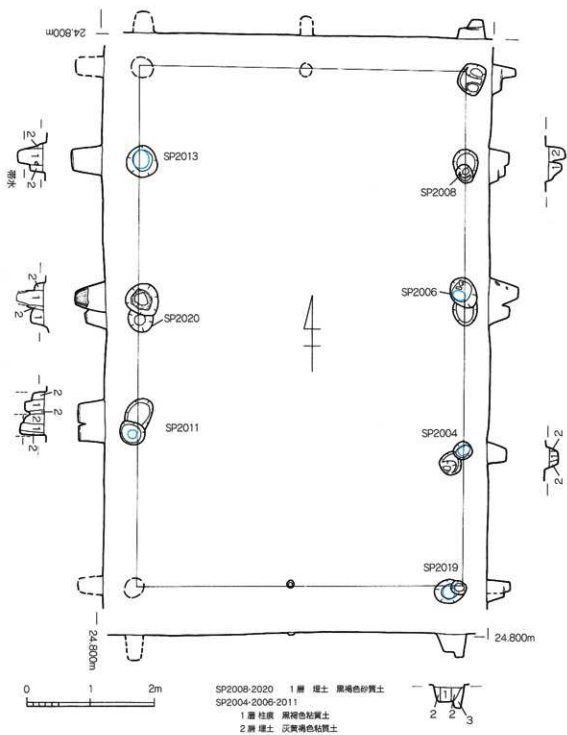
SD2021は、西区西半で確認された溝で、掘立柱建物跡SB2036・SB2037に近接している。全長4.8m、最大幅0.6mで、南側に向かって細くなっている。断面は浅い逆台形状を呈しており、深さは0.1mである。また、北側から2.3mまでは一段深くなっており、平面で確認されなかったことからSD2021より古い溝もしくは、2段掘りの可能性がある。

出土遺物は第22図に示した。1の備前もしくは堺産播鉢胴部片と2の瓦質の羽釜である。2は15～16世紀、1は堺産であれば18世紀以降と考えられるため、遺構の時期は中世～近世と判断さ

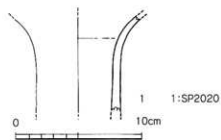


2:SP2012

第13図 1次調査区SB2036出土遺物実測図②(S=1/6)



第14図 1次調査区SB2037実測図(S=1/60)



第15図 1次調査区SB2037出土遺物実測図(S=1/3)

れる。

SD2001 (第23、24図、写真図版11、12)

SD2001は西区北辺を沿うようにはしる溝で、西区中央の段差より東側では検出されなかった。非常に浅いため遺構検出の際に失われてしまった可能性がある。全長9.6m、幅0.26m、深さ0.08mである。溝の方向は南側の暗渠とはほぼ平行している。

出土遺物は第24図に示した。1は唐津産陶器塚で見込みに砂目痕が認められる。2はくわんか碗である。遺構の時期は2より18世紀後半と考えられる。

SD2022 (第25、26図、写真図版12)

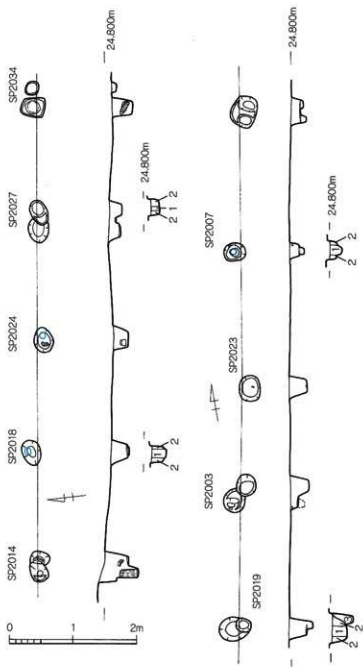
SD2022はSD2021の西側で確認された溝である。北端は東区北側への落ち込みで切られているが、現状では長さ6.5m、幅1m、深さ0.2mを測る。途中3.9m空けて、南側にものびるがその南端は調査区外にのびており全長等は不明である。溝の切れ目には非常に浅いが柱穴が2つ確認されており、柱間は2.2mであることから、門状の遺構の可能性もある。

遺物は陶磁器の小片が数点確認されたが、図化するものは1点のみであり、第26図に示した。1は景德鎮窯の青花碗底部片で、小野分類〔小野1982〕B-1類に相当するものである。遺構の時期は、1が認められることから16世紀代の中世に遡る可能性がある。

SD1018 (第27、28図、写真図版3、4、12)

SD1018は、東区の調査区中央から北東隅へ東西方向にのびる溝である。調査区外に続いているため、全長は不明であるが、現状で長さ16.2m、幅0.6m、深さ0.2mである。土層断面図のI-3層上面もしくは層中に石列が確認され、その下部が空洞であったことから暗渠の可能性が高い。石材は大分川の川原石と考えられるものが使用されている。石材は扁平なものが選択されており、長さ30cm、幅20前後のものが多い。

SD1018周辺には平行もしくは直行する溝が数本確認されており、いずれも耕作に伴う

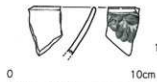


SD2001-2027
1層 柱痕 黒褐色砂質土
2層 埋土 黒褐色粘質土(地山まじり)

第16図 1次調査区SA2038実測図 (S=1/60)

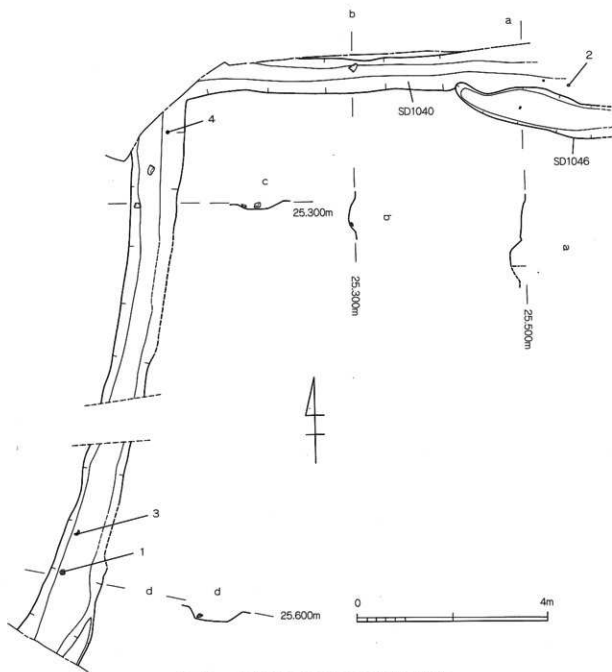
SD2017-SP2019
1層 柱痕 黒褐色粘質土
2層 埋土 灰黄褐色粘質土
SP2019
3層 柱痕 黒褐色粘質土

第17図 1次調査区SA2039実測図 (S=1/60)

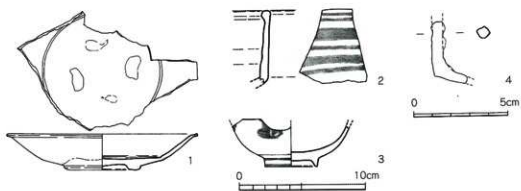


1:SP2003

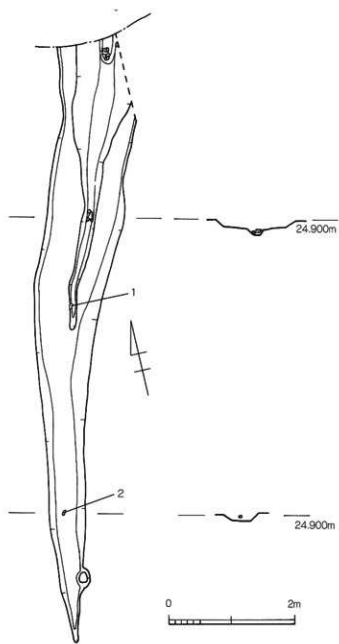
第18図 1次調査区SA2039出土遺物実測図(S=1/3)



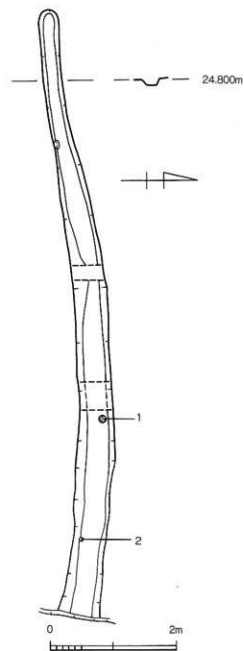
第19图 1次調査区SD1040・1046実測図(S=1/80)



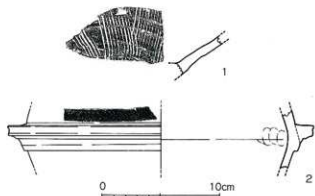
第20图 1次調査区SD1040出土遺物実測図(1~3:S=1/3, 4:S=1/2)



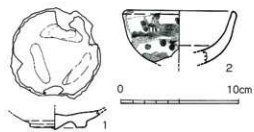
第21图 1次調査区SD2012実測図(S=1/60)



第23图 1次調査区SD2001実測図(S=1/60)



第22图 1次調査区SD2012出土遺物実測図(S=1/3)



第24图 1次調査区SD2001出土遺物実測図(S=1/3)

区画溝もしくは水路と考えられる。なお、土層断面の観察より SD1019 → SD1018 → SD1017 の順に南から北へ新しい溝が掘られたことがわかり、SD1017 は石列に到達していないことから、SD1018 は長期間暗渠として機能していた可能性がある。

出土遺物は第 28 図に示した。SD1018 から 1・2 が、SD1023 から 3 が出土した。1 は、瓦質の鉢の底部である。2 は非常に軽く胎土に空胞を多量に含む素焼きの土器片で、銅物に関連するものではないかと考えられる。3 は唐津焼の碗底部である。

SD1018 は 1 から 18 世紀後半頃、SD1023 は 3 から 17 世紀代とすれば、周辺の溝群は 17 世紀～18 世紀代のものと考えられる。

SD1009・SK1010 (第 29、30 図、写真図版 12)

SD1009 は、東区南東部に位置する溝状遺構で、SD1008・SD1012・SD1013 とほぼ並行して東西に延びている。これらの溝状遺構は、東区東壁より 5～6.5 m の整地層上では検出できなかった。非常に浅いため近世の水田化以降に失われた可能性もある。SD1009 の規模は、西側が調査区外に延びているため全長は不明であるが、現状で長さ 10.5 m、幅 0.6 m、深さ 0.2 m である。

SK1010 は、長径 0.95 m、短径 0.8 m の不整形な方形をしており、深さは 0.2 m を測る。埋土は灰褐色砂質土で、後述する SK2035 の埋土と類似する。遺構検出面より 0.1 m 上で石の上面が確認されたことから、本来の遺構形成面はより高かったと考えられる。

遺物は 1 の肥前系磁器の小杯が 1 点出土したのみである。

時期は、遺物から 18 世紀後半と考えられる。

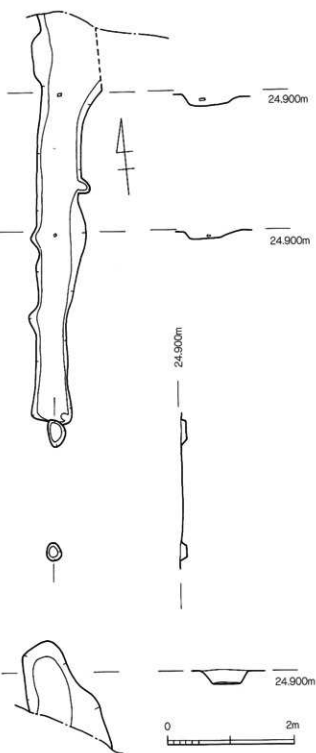
SK1010 は、SD1009 を切っていることから、東区南東部に東西に走る溝群は 18 世紀後半以前の所産であろう。

4) 土坑

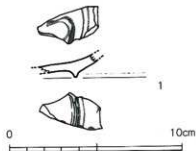
土坑は、東区で 4 基、西区で 2 基確認されたが、そのうち前述した SK1010 を除く遺物の出土した SK2035 について詳述する。

SK2035 (第 31、32 図、写真図版 12)

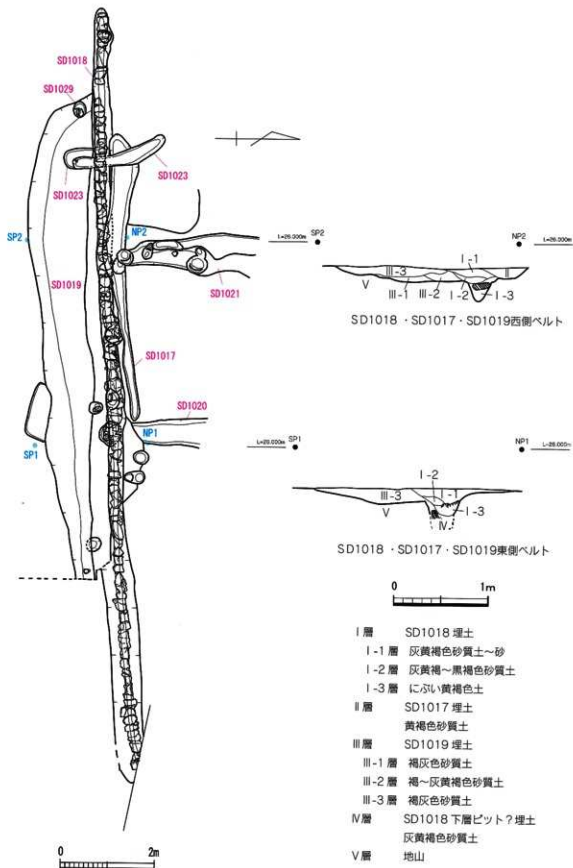
SK2035 は、西区東側に広がる黒色粘質土上で確認された土坑である。長さ 2.3 m、幅 0.8 m の長方形のプランをしており、深さは 0.1 m を測る。東側に直方体に近い石を検出した。



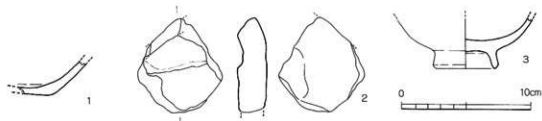
第25図 1次調査区SD2022実測図(S=1/60)



第26図 1次調査区SD2022出土遺物実測図



第27図 1次調査区SD1018実測図(平面S=1/80, 断面S=1/40)



1,2:SD1018 3:SD1023

第28図 1次調査区SD1018-SD1023出土遺物実測図(S=1/3)

出土遺物は第32図に示した1の肥前系磁器の陶胎染付碗が1点確認されたのみである。時期は、1から18世紀前半と考えられる。

5)ピット

ピットは、東区では中央西側のSB1048とSB1049周辺に集中して確認されたほかには、北西と南東、中央北側に点在している。西区ではSB2036・SA2038と北壁東半周辺にまとまった数が確認された。その中で、東区で遺物の出土したSP1002と西区で柱痕が確認できたものを詳述する。

SP1002(第33,34図、写真図版12)

SP1002は、東区中央北側で確認されたピットで、直径0.3m、深さ0.55mを測る。西側に0.05m程度の段がある。底面から直径6cm、高さ30cmの柱が認められた。

遺物は第34図に示した1の肥前内ノ山窯産の皿が1点確認されたのみである。時期は17世紀後半～18世紀中頃である。

SP2025(第33図)

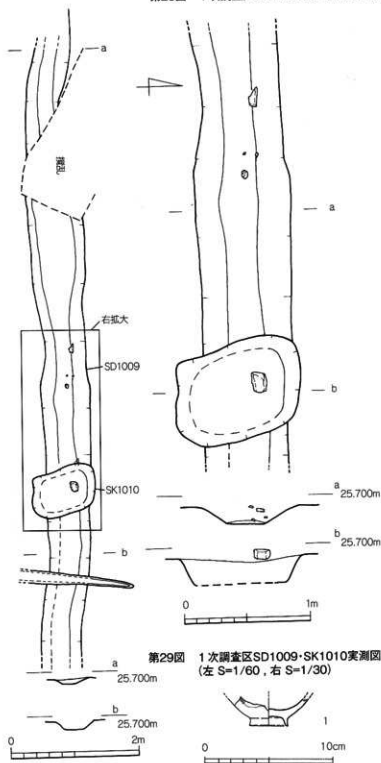
SP2025は長径0.75m、短径0.65mの楕円形プランで、深さ0.3mを測る。二段掘りになっており、深くなった直径0.45mの円中央に直径18cmの柱痕が確認された。柱痕の底部は丸みを帯びている。

SP2028(第33図)

SP2028は直径0.4m、深さ0.3mのピットである。柱痕の直径0.2m分のみ深く段掘りをしている。ピットの底部は平坦ではなく、丸みを帯びている。

SP2029(第33図)

SP2029は長径0.5m、短径0.3mの楕



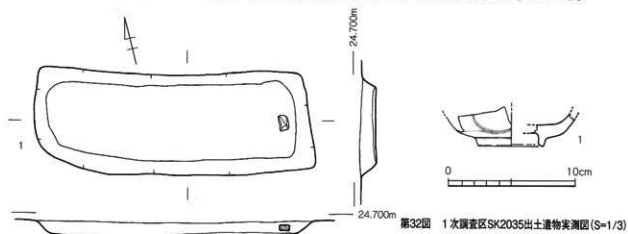
第29図 1次調査区SD1009-SK1010実測図(左S=1/60,右S=1/30)

第30図 1次調査区SK1010出土遺物実測図(S=1/3) 円形を呈し、深さは0.2mである。西側

にテラス状の段があり、ほぼ中央に柱痕が確認された。ピットの底部は丸みを帯びている。

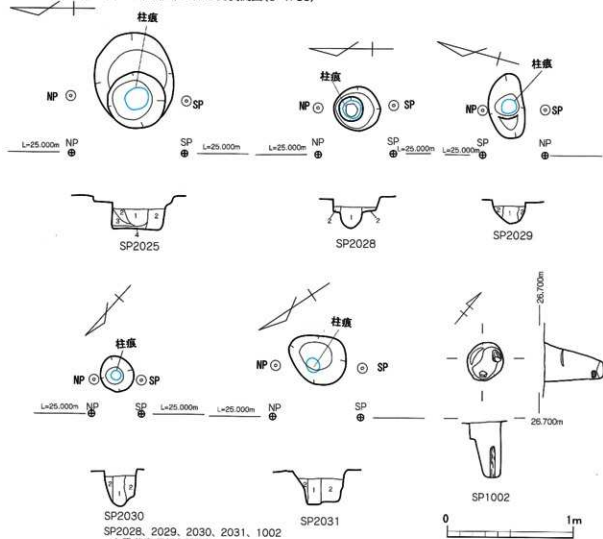
SP2030(第33図)

SP2030は直径0.3m、深さ0.3mを測る。中央で柱痕を検出した。ピットの底部は丸みを帯びている。



第32図 1次調査区SK2035出土遺物実測図(S=1/3)

第31図 1次調査区SK2035実測図(S=1/30)



第33図 1次調査区柱穴実測図(S=1/30)

- SP2028, 2029, 2030, 2031, 1002
- 1層 柱痕 黒褐色粘質土
 - 2層 埋土 褐灰色粘質土
- SP2025
- 1層 柱痕 黒褐色粘質土
 - 2層 埋土 褐灰色粘質土
 - 3層 埋土 につい黄褐色粘質土
 - 4層 埋土 褐灰色粘質土

SP2031 (第33図)

SP2031は直径0.45 mの不整形な円形で、深さは0.3 mである。中央やや西よりで柱痕を確認した。ピットの底部は平坦である。

西区の柱痕は前3者が直径0.2 mとやや大きいのに対して、後2者は直径0.1 mとやや小さいことを特徴として挙げておく。

なお、西区のピットからはいずれも遺物が出土せず、時期からは不明であるが、SA2038～SB2037と同時期の所産と考えられる。

6)遺構外出土遺物(第35図、写真図版12)

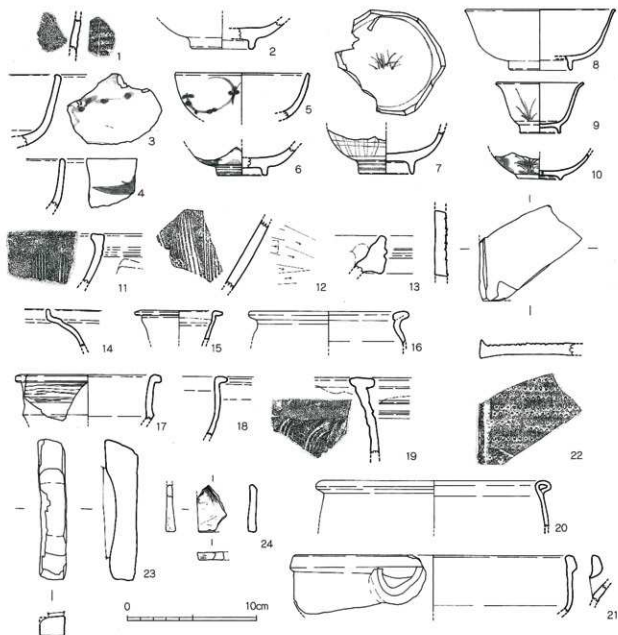
遺構外出土遺物は、I～III層もしくは、遺構検出時に地山直上から確認された。以下、図化するものうち特徴的なものを第35図に示した。

1は古墳時代の製塩土器片胴部であり、外面にタタキ痕が認められる。

2は龍泉窯系青磁碗の底部である。3・4は肥前系磁器の陶胎染付碗で



第34図 1次調査区SP1002出土遺物実測図 (S=1/3)



第35図 1次調査区包含層・その他出土遺物実測図 (S=1/3)

ある。5・6も肥前系磁器でくわんか碗である。7は肥前系の丸碗である。8は紙型摺りの碗である。9は肥前系磁器の小杯である。10は肥前系磁器小杯の色絵碗である。11・12は瓦質の播鉢である。11は口縁部で端部上面に面をなす。外面直下には沈線が3条施される。播目は1単位5条で等間隔についていると想定される。12は胴部下半の破片で外面には横方向のケズリ調整が認められる。播目の単位は6条であろう。13は備前播鉢口縁部で口縁部が発達し、外面に2条の沈線が施される。小片ではあるが、その特徴から乗岡実氏の編年（乗岡2000a、2000b）で近世1期のものである。14は丸みを帯びた肩部から口縁部が短く直立するもので、関西系陶器の急須である。15は壺の口頸部で外方に直線的に立ち上がり、口縁部はL字状に折れ曲がる。産地は不明である。16は肩部からほとんどすぼまらず短く直立する頸部にいたり、口縁部は大きく外反する。口縁部は折り曲げて肥厚保させている。肥前系陶器と考えられる。17は胴部中央で屈曲して外反気味に口縁部にたちあがり、端部は断面方形を呈する。肥前系陶器の灰落しである。18は産地不明の陶器で鉢もしくは壺である。19は丸みを帯びながら口縁部にいたり、口縁部は鋸状を呈する。内外面とも口縁部は露胎している。内面はタタキによる同心円文が残る。唐津系陶器の鉢と考えられる。20・21は関西系行平鍋である。20は断面が環状の口縁部を呈する。21は底部から口縁部が直線的に立ち上がり、口縁部は断面長方形である。把手の付け根が残存しており、中空を呈する。22は陶製の卸金である。23は結晶片岩製の砥石で、上面の中央部分が窪んでおり使用面と考えられる。24も砥石で、上面だけでなく側面も使用されている。上面には捺痕が認められる。

4 小結

雄方・後遺跡1次調査区において、主に中世後半～近世の遺構・遺物が確認され、それ以外にも古墳時代～中世前半の遺物が認められた。それらを時期ごとにまとめていく。

1次調査区の最も古い資料はSP1036で出土した古墳時代の製土土器片（第35図-1）である。また、試掘調査時に図化はできないが弥生土器・土師器片も認められた。ともに表面の摩滅が著しいため、原位置に近いものではないと考えられる。当遺跡の北には大分川があり、その右岸が氾濫原であった際に展開した集落に伴う資料と考えられる。ただし、田原地区では弥生時代～古墳時代の集落は確認されており、今後の検討が必要である。また、1点ではあるが龍泉窯系青磁碗が確認されており、中世前半には3次調査区で認められた集落の一部にあたる場所であった可能性がある。

1次調査区に本格的に集落が形成されるようになったのは中世後半のことである。最も古い時期の遺構としてSA2039やSD2022があり、主に西区に当該期の遺構が認められる。SD2022は3.9mの切れ目があり、そこに浅くはあるが柱穴が確認された。1間で2mを測ることから門状の遺構も想定される。遺構の分布状況からは集落の西側の区画をなすものであろう。西区東半（3区）の落ち込みで認められる黒色粘質土の堆積時期とはほぼおなじであり、これらの遺構が形成された時期に谷状を呈していたか、埋没しており東区と一体の集落域であったかが今後の検討課題である。SA2039は欄列としたが、同じ個所に後述する掘立柱建物跡SB2036が認められることから建物跡の可能性もある。出土遺物は少ないが、瓦質播鉢や景徳鎮窯系青花碗や漳州窯系碗が認められる。断定はできないが、景徳鎮窯系青花碗や漳州窯系碗からは一般集落と比較してやや優位にある集落が想定される。

本調査区の遺構の中心を占める時期は近世前半であるが、中世後半のSA2039と同じ箇所掘立柱建物跡SB2036・SB2037やそれに直交する欄列SA2038が確認されることから、集落が継続して営まれていたと考えられる。西区東半で見られた自然の落ち込みを埋める黒色土はこの段階では地山面まで達しており、その上に遺構が形成されている。集落の継続性の観点からは、西区でSA2039→SB2036→SB2037という同じ箇所での欄列・掘立柱建物跡の建て直しが復元できたことは非常に興味深いものがある。この段階には、東区でもSB1048やSB1049が確認され、両者は現時点では遺物からSB1049→SB1048の順と考えられる。また、西区北東部付近で集中して認められた柱穴群も柱痕や埋土がSB2036・SB2037を構成するものと非常に類似することから、同時期の所産といえよう。ただし、これらの掘立柱建物跡は、東区のSB1048がN-2°W、SB1049がN-4°Wとほぼ同じ主軸をとる。西区のものはSB2036がN-10°E、SA2039がN-9°E、SA2038がN-97°Eを主

軸とする一方で、SB2037はN-1°Eを主軸とする。主軸方向からは西区のものと同様のSB2037がほぼ一致することから同時期の可能性が高い。それ以前の所産と考えられるSB2036やSA2039はより東へ主軸が振っている。溝や溝状遺構も掘立柱建物跡や欄干に対応するように平行もしくは垂直に延びており、集落内での小区画を想定することができるため、それぞれの動態の中で捉えるべきものであろう。

東区東半では、水田化する以前の島の畝間と考えられるSD1009のような溝状遺構が東西に延びており、集落の直近まで耕作地であったと考えられる。また、水利に関する遺構としてSD1018や西区の暗渠等があり、いずれも東西に延びている。SD1018の起点がSB1048の東1mにあることから、当時の水利を検討する上で重要な遺構といえる。また、上述したように東区のSD1001やSD1018がほぼ東西に延びているのに対して、西区の暗渠は南に傾いている。

これらの遺構の上層には水田層が確認されており、1次調査区で確認された遺構の大半は18世紀前半までに廃絶されており、18世紀後半以降に調査区全体が水田となったと考えられる。このことから田原地区全体が享保井路の完成により水田化されたことが想定される。明治33年に陸軍省が調査した5万分の1地形図を確認すると、西積田村役場が1次調査区の南側に位置し、1次調査区の東側を南北に走る市道は横超寺と田原神社を結ぶ道である。集落は1次調査区の東側にあたる道をはさんだ南北に展開するものと南側100～200mの丘陵裾部にも認められる(第37図赤色部分)。おそらく、丘陵裾部の集落がより古いもので、中世後半以降に北側の低地部に



第36図 1次調査区西区遺構変遷図(S=1/400)

進出した際の最も拡張した時期の西側端が1次調査区周辺と考えられる。その後、享保井路開削後に水田化されて行く過程で廃絶され埋没したと考えられる。その後は国道210号線開通に伴い、水田となった個所でも丘陵の先端部や微高地を中心に宅地化が進んでいったと考えられる。

以上、1次調査区の中世後半の集落形成から近世後半の水田化までを中心に確認した。1次調査区は南側から広がる丘陵の西側末端部にあたることから、中世における集落形成の最終段階になって利用された場所と考えられる。



第37回 明治33年作製地形図における1次調査区と周辺の様相(S=1/25,000)
 (大正元年大日本帝國陸地測量部発行「大分」を拡大して使用)
 ※田原神社は地図上に記載されていないため筆者追記

【参考文献】

- 小野正敏 1982 「15～16世紀の集付跡・里の分類と年代」『貿易陶磁研究』NO.2 貿易当時研究会
- 高島豊福 2009 「木ノ上・田原の墳墓群」大規模宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 漆間横穴墓群・高栄山横穴墓群・高栄山第2横穴墓群・高栄山第3横穴墓群・小柳遺跡・六部塚古墳 大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第95集 大分市教育委員会
- 桑岡実 2000a 「中世備前焼壺(壺)の編年案」・「備前焼播鉢の編年案」『第3回中近世備前焼研究会資料 付第1回・第2回研究資料』中近世備前焼研究会
- 桑岡実 2000b 「近世備前焼播鉢の編年」『岡山城三之丸曲輪跡-表町一丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査-』岡山市教育委員会

表1 雄方・後遺跡1次調査遺物観察表(土器・陶磁器)

図版 番号	押印 番号	写真 図版	遺構名	種類	器形	生産地	法量 (cm) () は復元径			備考
							口径	底径	器高	
8	1	13	SP1031	磁器	皿		(12.8)	(4.2)	3.4	
10	1	13	SP1032	不明	不明		(13.9)			
10	2	13	SP1032	瓦質	火鉢					
12	1	13	SP2006	陶器	携鉢皿		(22.2)			
15	1	13	SP2020	磁器						
18	1	13	SP2003	磁器	碗	景徳鎮				
20	1	13	SD1040	陶器	皿		(14.8)	5.2	2.9	
20	2	13	SD1040	陶器	香炉	肥前				
20	3	13	SD1040	磁器	碗			(4.0)		
22	1	13	SD2021	陶器	摺鉢	備前				
22	2	13	SD2021	瓦質	鍋					
24	1	13	SD2001	陶器	碗			4.6		
24	2	13	SD2001	磁器	碗		(9.0)			
26	1	13	SD2022	磁器	碗	滑州				
28	1	13	SD1018	瓦質						
28	2	13	SD1018	土器	不明					
28	3	13	SD1023	陶器	碗			4.4		
30	1	13	SK1010	磁器	小坏			(2.9)		
32	1	13	SK2035	磁器	碗	肥前		(5.0)		
34	1		SP1002	陶器	皿					
35	1	13	SP1036	製塩土器						古墳
35	2	13	4区	磁器	碗	龍泉		(4.6)		
35	3	13	1区	磁器	碗					
35	4		試掘3トレンチ	磁器	碗					
35	5		試掘1トレンチ	磁器	碗		(10.2)			
35	6		2区	磁器	碗			(3.6)		
35	7	13	試掘4トレンチ	磁器	碗			(4.0)		
35	8		表土	磁器	碗		(11.3)	(6.4)	4.8	
35	9	13	1区	磁器	小坏		(6.6)	4.0	3.0	
35	10	13	1区	磁器	皿			(3.4)		柴付
35	11	13	4区	瓦質	携鉢					
35	12		4区	瓦質	携鉢					
35	13		1区	陶器	摺鉢	備前				
35	14		表土	陶器	壺					
35	15		表土	陶器	壺		(5.8)			
35	16		床土層	陶器	壺		(11.4)			
35	17		1区	陶器	鉢					
35	18		表土	陶器	壺					
35	19	13	1区	陶器	壺					
35	20		1区	磁器	壺		(17.6)			
35	21	13	表土	陶器	片口		(21.0)			
35	22	13	1区	陶器	銅皿					

表2 雄方・後遺跡1次調査遺物観察表(木製品・石製品・鉄製品)

図版 番号	押印 番号	写真 図版	遺構名	種類	材質	寸法 (cm)				備考
						部位	長さ	幅	厚さ	
8	2		SP1031	不明	鉄		3.9		0.7	12.6g
8	3		SP1031	不明	鉄		5.0		0.9	12.2g
8	4	13	SP1037	石臼		上臼			9.2	
8	5	13	SP1003	石臼	凝灰岩	上臼	(22.0)		11.2	
10	3	13	SP1029	石臼	凝灰岩	下臼			6.0	
13	2	13	SP2012	桶?	木	不明				
20	4		SP1040	不明	鉄		2.8		0.7	2.8g
35	23	13	表土	砥石	結晶片岩		11.2	2.0	1.6	
35	24	13	SP1028	砥石			3.7	2.4	0.6	

第2節 2次調査区

1 調査の概要

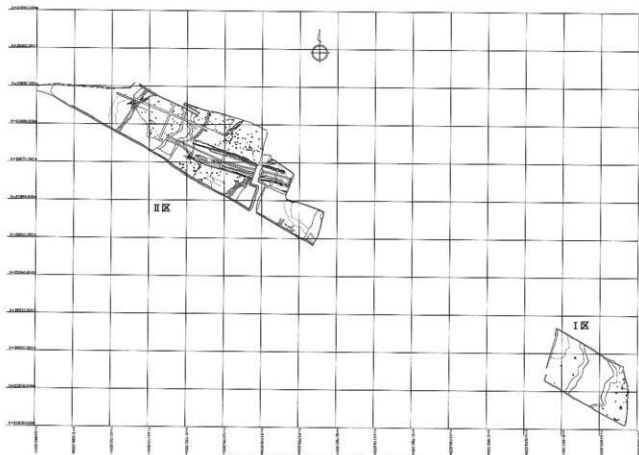
2次調査区は、今回の3次にわたる調査の中で最も西側に位置する。その地点は、大分川に向かって富士見ヶ丘団地がある台地が突き出てくる場所にあたる。台地から八つ手状に延びる丘陵は、現状で棚田または段々畑を形成しながら徐々に低くなり、調査区の北側250mで大分川によって削られている。

また、大分川は調査区の上流側約1.5kmのところで「く」字形に折れ、大きく北側に流れを変えているが、一時的には折れずにそのまま南側の丘陵裾部に沿って流れていた痕跡が空中写真などから窺うことが出来る。その一部は今回の2次調査区の西側にかかっている。

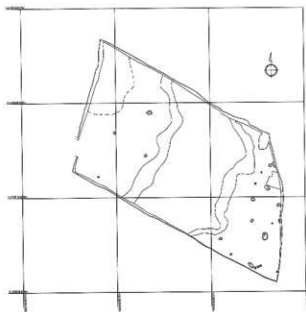
調査面積は第Ⅰ区と第Ⅱ区を合わせて1,550.5m²で、平成21年7月28日から平成21年10月2日にかけて調査を行った（Ⅰ区とⅡ区の間は、試掘調査の結果遺構は検出されていない）。

遺構としては小河川状の溝と、そこから取水する水路、水場に向かって集落から延びる道などが検出された。小河川状の溝は江戸時代には埋没しており、そのことは遺跡の山側（南側）を流れる、江戸時代中期に開削された享保井路の完成と関係があるものと考えられる。水場に向かって延びる道は幅約4mで掘り窪められており、溝の埋没後にその部分は水田になっていた。

また、弥生時代と考えられる包含層（水田か？）が遺跡全体に広がっており、この時期に何らかの活動があったことが考えられるが、明確な遺構は確認できなかった。さらに、遺構検出面の砂層には縄文時代晩期の土器が包含されていた。



第38図 2次調査区位置図(S=1/1,000)



第39図 2次調査第I区平面図(S=1/400)

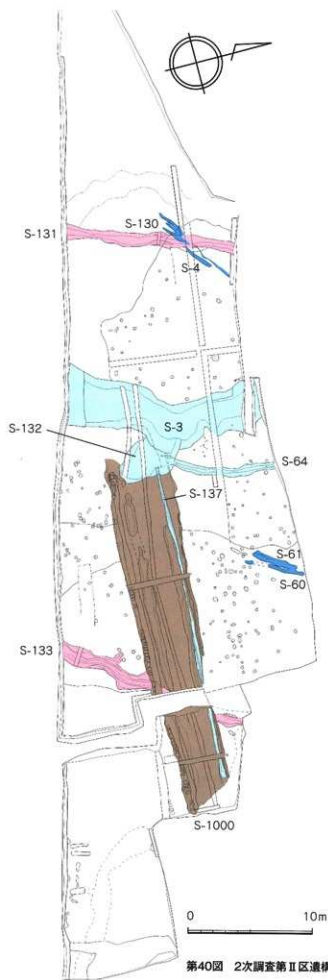
なお、第I区は、試掘で遺構と考えられた落ち込みが、表土剥ぎの結果自然の浅い谷と判明した。第I区の東側は第1次調査の西区に接するが、第1次調査の西区で検出された建物遺構の広がりが見今調査で確認された自然の浅い落ち込みによって規制されていたことがわかる。

2 層序

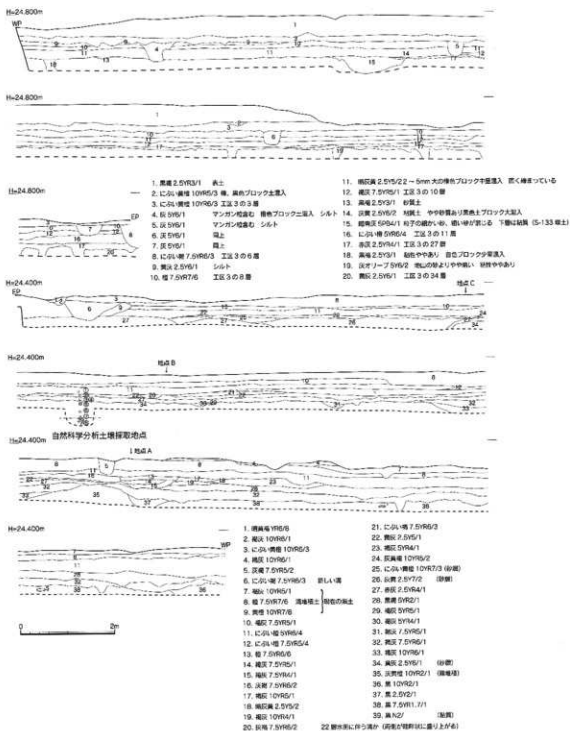
遺構検出面は砂層である。第II調査区南壁の土層図(第41図)で確認すると、この砂層は34層に該当する。基本的にその上部には水田層が堆積し、最上層は現表土(水田又は畑の耕作土)である。また、遺構検出面の砂層の下は黒色の粘質土が厚く堆積している。(この状況は隣接地の工事によって深堀されている際に確認している。)この黒色粘質土は河川堆積物と考えられる。第II調査区の南壁土層(第41図)を見ながら、この地域の土砂堆積状況について触れておきたい。

調査区の南壁の土層について説明する。略南北方向に伸びる断面は、北側から下ってくる丘陵に対して直交する形となる。基本層序は、地表面から8層の現表土(耕作土)、10層・11層・22層・27層の旧耕作土、34層の砂層、39層の黒色土となる。ただし、これらの基本層序は、西側に行くと8層と11層以外は消え、新たに28層・32層・38層などの黒褐色から灰褐色の粘質の強い土壤が堆積している。これらは、大分川旧河道の堆積物であると考えられる。

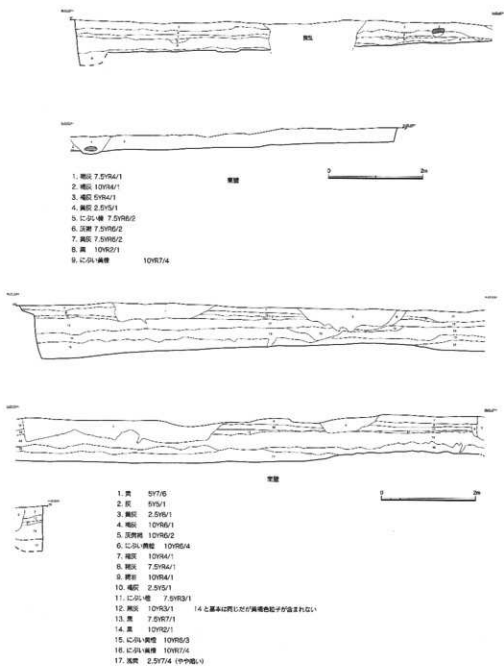
目視で最も古い水田層と考えられる22層、さらにはその上下にある16層と27層(いずれもプラントオパール分析で水田層の可能性が高いとされている。)は、いずれも自然堤防状の35層の高まり(地点A)のあたりで消えている。35層は灰黄褐色土で、大量の拳大の礫が含まれる。自然堆積だと思われるが、平面的にも幅1m程で西側に膨らみながら南北に伸びているのが確認できた。この高まりを挟んで左右(東西)では土層の様子が大きく異なっている。地点Aから西側は、基本的に低湿地(旧河道域)となっている。ただし、地点Aの東側でも砂層(34層)の下部には黒色土が厚く堆積している(隣接地の擁壁工事による掘削状況)ので、砂層が堆積することによる微高地化による安定が、地点Aより東側地域の耕作地としての土地利用を促したものであろう。その水田層のあり方を見ると、22層の水田は、地点Bで浅い溝とその両側の畦畔状の高まりによって東西2枚の水田が形成されていたことがわかる。27層の水田は、地点CでS3に落ち込むようにして終わっている。土層では確認出来なかったが、本来はS3が27層を切っており、そこに27層が堆積している、と見るべきであろう。この27層はS3を挟んで東側にも広がり、S-133に接する形で終わる。そのS-133に接する手前1mでは、10cmほど高まる。



第40図 2次調査第Ⅱ区遺構配置図(S=1/300)



第41図 2次調査第I区南壁土層図



第42区 2次調査第Ⅱ区土層図

このように、2次調査区は段丘裾部の微高地と、それを切る大分川旧河道の低湿地で形成されていることがわかる。

3 遺構と遺物

1) 溝

S-3 (第43図)

調査区のほぼ中央を南から北に向かって流れる溝である。幅4m、深さは2.5mで、断面形状は緩やかなU字形である。第42図の土層断面図からわかるように堆積土の基本は砂層であるが、中程で黒色粘質土の堆積が見られるなど、やや水流が滞留した時期もあったと思われる。南西側からやや東に膨らみながら流れてきた流路は、調査区中程でクランク状に折れ、北に向かって流れて行く。クランク状に折れた部分でS-132と接している。S-132は、北側でS-64が北に向かって伸びているとともに、東西方向に伸びるS-1000にも接している。これらはお互いに明確な先後関係を確認できず、同時併存的に存在した可能性が高い。

この溝が自然流路なのか人工的な溝であるのかは中々判断がつかないが、この溝のすぐ西側が旧河道の低湿地だったことを考えると、あえて微高地上に水路を築いたと考える方が良いのかもしれない。

出土遺物は縄文土器片と杭である。第49図1から5である。4と5は晩期後半の縄文土器で、1から3は加工痕のある杭と考えられる木器である。縄文土器はS-3の壁となる34層からの流れ込みであろう。

S-132 (第43図)

S-3と一体の遺構と考えられる。S-3に堰を設けてS-132に水を引き込み、その水をS-64やS-137に流すと共に水場としても利用していたと考えられる。S-132は、南北3.4m、東西3.6mで深さ0.3mである。平面的にはS-3との切り合い関係は認められなかった。S-64やS-137との切り合い関係も同じく認められなかった。全体図(第40図)に見えるS-132を切る東西に延びる細長い溝(S-1とS-2)は、S-1000の土層断面図(第48図)に見えるS-1とS-2である。図からわかるように、S-1000が水田になって以後の暗渠排水路で、竹を敷き込んでいた。おそらく、S-3を埋める際に、排水のために敷き込んだものであろう。

出土遺物は無かった。

S-64 (第44図)

S-132の北東部から延びる幅0.6m、深さ0.5mの溝である。土層断面図からわかるように、第6層が灰白色の粘質土である他は砂層で埋まっている。水路と考えられる。

出土遺物は、細片ではあるが弥生土器が出土している。弥生土器は、S-64が切る27層からの流れ込みであろう。

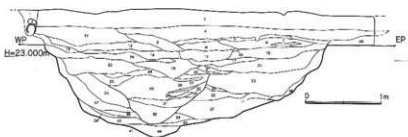
S-137 (第48図)

S-132の東側から東南東に向かって直線的に伸びる溝で、S-135に切られている。S-132と接する部分の状況については切り合い関係が明確ではなく、同時に存在したものと考えられる。幅は0.2m、深さは0.2m程で、灰色の土が堆積していた。部分的には砂質土となる。S-64と同様に水路と考えられる。

出土遺物は無かった。

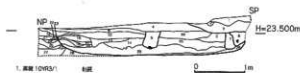
S-131 (第45図)

調査区の西側で、調査区を南北に横断する溝である。幅1.0m、深さ0.4mで、長さは13.5m検出された。断面図を見るとわかるように、固く締まった最下層の第8層とした5cm大の礫を含む灰黄色土は溝の掘り直して削られており、更に第5層、6層も掘り直しに伴う土層である。6層と7層以外は砂層であり、流水があったことがわかる。調査区南壁の土層断面からわかるように、S-131の西側の肩部は礫を多量に含む35層の高まりである。



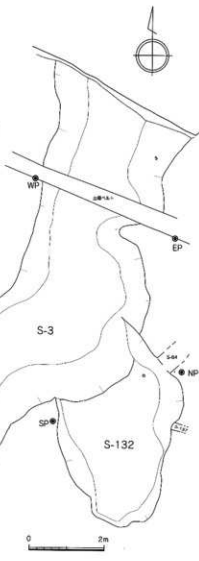
- | | | | |
|-----------------|---------------------|----------------|------------------|
| 1. 深層 10R7/1 | 硬い硬り込み | 23. 底層 2.5V6/2 | 中や強い砂層 |
| 2. 底層 | | 24. 底 7.5V4/1 | 砂層 |
| 3. 底層 10R10/1 | 粘層 | 25. 底 2.5V2/1 | 中や強い粘土土層 |
| 4. 底層 10R6/2 | 2~3mmの砂粒を混じ | 26. 底 2.5V5/1 | 中や強い砂層 |
| 5. L-底層 7.5V5/3 | 砂層 | 27. 底 10V14/4 | 中や強い砂層 |
| 6. 底層 7.5V5/2 | 砂り砂り砂層 | 28. 底 10V14/4 | 中や強い砂層 |
| 7. 底層 10V5/2 | 2~3mmの砂粒を混 | 29. 底層 10V5/5 | 中や強い砂層 |
| 8. 底層 2.5V7/1 | 3~5mmの砂粒を混 | 30. 底 10R2/1 | 砂層 |
| 9. L-底層 10R7/2 | 砂層 | 31. 底層 10R3/2 | 10cm以上の粘土と砂層 |
| 10. 底層 10R6/2 | 砂層 | 32. 底 2.5V2/1 | 中や強い粘土土層 |
| 11. 底層 7.5V6/1 | 2mmの砂り、7/2~3mmの砂粒を混 | 33. 底 10V2/1 | 粘層の強い粘土 |
| 12. 底層 2.5V5/1 | 2~3mmの砂粒を混じ | 34. 底 7.5V2/1 | 中や強い粘土土層 |
| 13. 底層 2.5V7/2 | 砂層 | 35. 底 5V1/1 | 粘層の強い粘土 |
| 14. 底層 10V3/3 | 砂層 | 36. 底層 2.5V7/2 | 粘層上 |
| 15. ボンパツ層 5R3/2 | 砂層 | 37. 底 2.5V3/1 | 粘層上 |
| 16. L-底層 10R7/1 | 砂層 | 38. 底層 7.5V5/2 | 10cm以上の粘土と砂層 |
| 17. 底層 10V4/1 | 砂層 | 39. 底層 7.5V2/2 | 粘層上 |
| 18. 底層 10V5/1 | 砂層 | 40. 底 10V2/1 | 中や強い粘土土層 (本層線か?) |
| 19. 底層 10R5/6 | 10cm以上の粘土と砂層 | 41. 底層 10V5/2 | 粘層 |
| 20. 底層 2.5V5/2 | 中や強い砂層 | 42. 底 7.5V5/1 | 砂層 |
| 21. 底 7.5V2/1 | 砂層 | 43. 底層 10V5/2 | 粘層上 |
| 22. 底 7.5V7/2 | 砂層 | 44. 底 7.5V5/5 | 10cm以上の粘土と砂層、砂層 |

S-3土層図 (縮尺1/40)

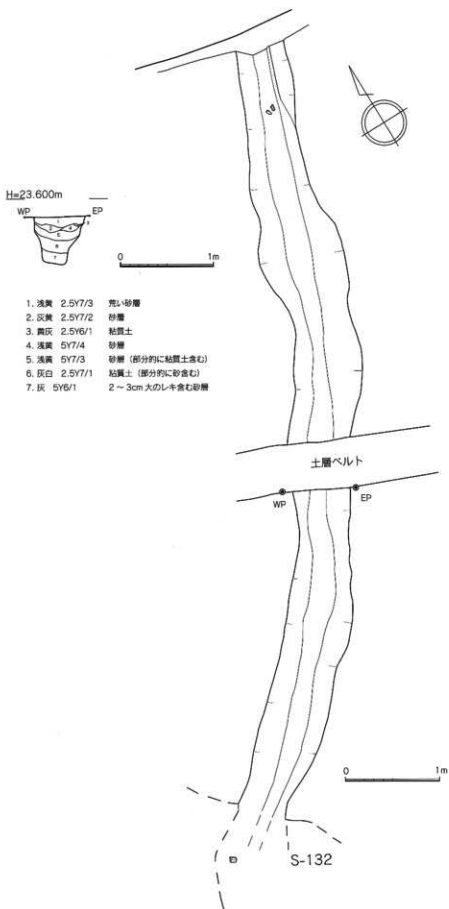


- | | |
|------------------|--------------------------|
| 1. 底層 10R3/1 | 粘層 |
| 2. 底層 10R5/1 | 粘層中や砂り |
| 3. ボンパツ層 2.5V5/1 | 粘層 |
| 4. 底層 2.5V5/1 | 粘層中や砂り |
| 5. 底層 2.5V5/1 | 粘層 (強粘) |
| 6. 底層 10R6/1 | 粘層 (強粘) |
| 7. 底層 5V5/2 | 粘層 砂り砂り層 |
| 8. 底層 7.5V5/2 | 粘層中や砂り 砂り砂り層、強く砂りや粘土 |
| 9. 底層 7.5V4/1 | 粘層 砂り砂り層 |
| 10. 底層 7.5V5/2 | 粘層強い、粘り、粘り砂り層、6mm以上の砂り層 |
| 11. 底層 | |
| 12. L-底層 10R7/2 | 粘層 粘り砂り層 |
| 13. 底層 10R5/2 | 粘層 ヴンパツ層、砂り砂り層 |
| 14. 底層 7.5V5/1 | 粘層 1.2mm以上の粘り砂り層 |
| 15. 底層 2.5V5/1 | 粘層 |
| 16. L-底層 10R7/2 | 粘層 ヴンパツ層と砂り層 0.5mm以上の砂り層 |
| 17. L-底層 10R5/4 | 粘層 粘り砂り層 0.5~1mm以上の砂り層 |
| 18. 底層 10R5/2 | 粘層 ヴンパツ層と砂り層 |
| 19. 底層 10R5/6 | 粘層 粘り砂り層 1~5mm以上の砂り層 |
| 20. 底層 10R7/1 | 粘層 粘り砂り層 |
| 21. L-底層 10R7/2 | 粘層 粘り砂り層 |
| 22. 底層 2.5V7/3 | 粘層 粘り砂り層 |
| 23. 底層 2.5V5/2 | 粘層 粘り砂り層 |
| 24. 底層 2.5V5/1 | 粘層 0.5~1mm以上の砂り層 |
| 25. 底層 2.5V5/1 | 粘層 ヴンパツ層と粘り層、粘り砂り層 |
| 26. 底層 2.5V7/2 | 粘層 粘り砂り層 |
| 27. 底層 10R5/1 | 粘層 粘り砂り層、粘り砂り層 |
| 28. 底層 7V3/1 | 粘層 粘り砂り層 |

S-132土層図 (縮尺1/60)



第43図 2次調査区S-3, S-132 (S=1/100)



第44図 2次調査区S-64(S=1/40)

ただ、平面的にみると両者の関係は一体では無く、35層の高まりは西側にある大きく弧を描く様に膨らむのに対し、S-131は直線的に伸びている。しかし、S-131が35層の高まりを意識してこの場所に掘られたのは間違いないだろう。この35層を挟んだ西側は段丘崖の存在が想定され、低湿地となっていた。

出土遺物としては縄文晩期土器片があるが、いずれも流れ込みと考えられる。

S-133 (第46図)

調査区の東側寄りで検出された溝である。S-1000に切られている。幅は0.5mから0.9m、深さは0.5mでやや蛇行している。土層断面図を見ると、いく度かの掘り返しが認められるが、基本的に流水と滲水を繰り返している。途中で北に向けて枝溝が伸びている。調査区の南壁土層の27層は、このS-133の西側でやや高まりを持ちながら終わっている(ただし、平面的にはS-132の1mほど東まで27層が広がっているのが確認されている)。27層が水田層と考えられることから、このS-133は27層の水田に伴う水路と考えられる。そうであれば、枝溝は水田への水口と考えられるだろう。

出土遺物としては縄文晩期土器片が出土しているが、流れ込みである。

S-60、S-61 (第47図)

これらの遺構群は調査区北側のやや東寄りで検出された溝である。平面的に27層が弧を描く様に確認されたすぐ外側に平行するように掘られている。幅はいずれも25～40cmで深さは5～8cm程度と浅い。そのため南側は削平されて確認出来なかったものと思われる。堆積土は黒色で、27層の黒色土と同じである。27層が水田と考えられるので、その水田と何らかの関係の有する遺構であろう。

出土遺物は無かった。

S-130、S-4 (第47図)

調査区の北側西寄りで確認された溝である。S-131を切っている。幅は20cmから40cmで、深さは5～7cmである。いずれの溝もほぼ直線的で、底面の高さにもほとんど差が無い。堆積土は黒色であった。同じく黒色土である27層と同一のものと考えられる。

出土遺物は無かった。

H=23,200m

EP

WP



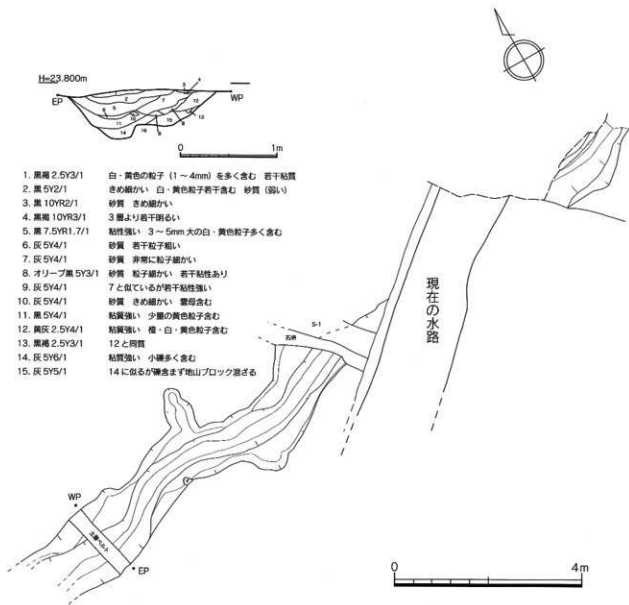
- | | |
|------------------|--------------------|
| 1. 灰黄褐 10Y5/2 | 砂層 |
| 2. 暗灰黄 2.5Y5/2 | 細かい砂層 |
| 3. 褐灰 10Y5/1 | 砂層 |
| 4. にぶい黄褐色 10Y5/3 | 細かい砂層 |
| 5. 黄灰 2.5Y5/1 | やや荒い砂層 |
| 6. 灰 5Y6/1 | 1~2cm 大のレキ含む |
| 7. 黄灰 2.5Y6/1 | 粘質土 |
| 8. 灰黄 2.5Y6/2 | 5cm 大のレキ含むさそう (硬い) |

WP

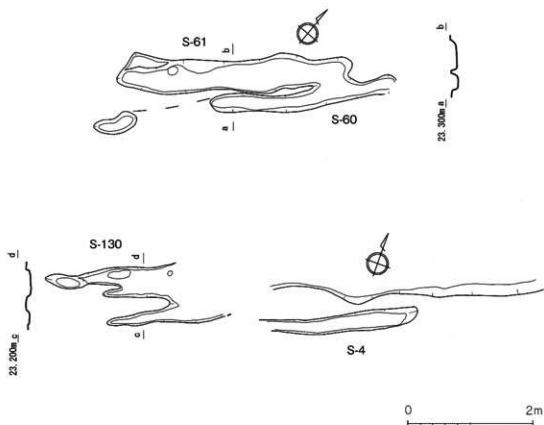
EP



第45図 2次調査区S-131 (s=1/60)



第46図 2次調査区S-133(s=1/80)



第47図 2次調査区S-60、S-61、S-130、S-4(S=1/60)

2) 道跡

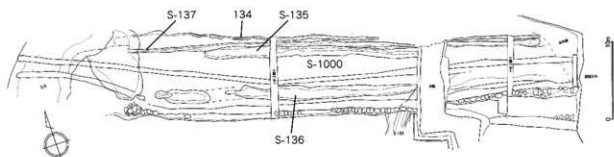
S-1000 (第48図)

S-1000は、調査区の東側からほぼ中央にかけて、複数の遺構によって構成される遺構群である。複数の遺構の内、S-136とS-135(A遺構とする)がセット、S-134と石列によって挟まれた浅い溝状遺構(B遺構とする)がセットと考えられる。土層断面図からわかるように、A遺構はB遺構に切られているので、当初は2本の溝に挟まれた何らかの遺構があり、後に幅を広げて、両側に石列を築いたとすることができる。この段階で幅11mで、深さは0.3mとなる。

このS-1000の性格を考える上で重要となるのは、この遺構の西端がS-132に接するように終わっていることである。水場と考えられるS-132に向かって一直線に伸びているのである。B遺構によって形成された幅11m、深さ0.3mの浅い長方形の遺構は最終的に水田になるが、それ以前は道であったと考えられる。つまり、集落から水場へ行く道であったとすることができる。

このS-1000が形成される前のS-137は水場から水を供給する水路であろう。同様の水路はS-132から北に向かって伸びるS-64がある。

出土遺物は、道としての機能を失って、水田になってからのものである。第50図6、7、10、11が水田層からの出土である。



南方・後遺跡Ⅱ 水田層土層図 (中央・ベルト)



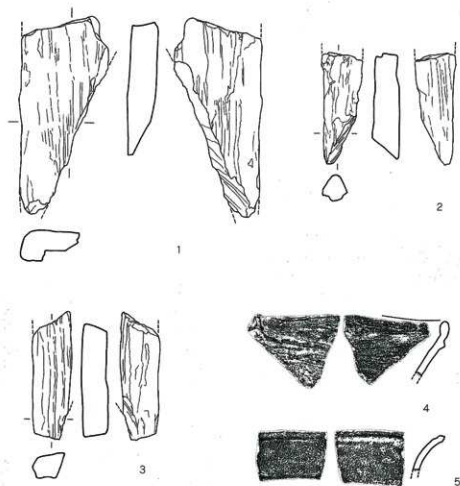
1. 敷層 1.075/1 磁器類(土器類)
2. 敷層 2.075/1 磁器類(土器類)
3. 敷層 2.075/2 磁器類
4. 敷層 1.075/4 磁器類 土 焼物(磁器類) 土 焼物(土器類)
5. 敷層 1.075/5 磁器類 土 焼物(土器類) 土 焼物(土器類)
6. 敷層 1.075/6 中中層 アンゴラ、磁器類(土器類) 1 - 5cm 大の土器類
7. 敷層 1.075/7 磁器類 土 焼物(土器類)
8. 敷層 2.075/1 磁器類 土 焼物(土器類)
9. 敷層 2.075/2 中中層 土 焼物(土器類)
10. 敷層 2.075/3 磁器類 土 焼物(土器類)
11. 土層 1.075/1 磁器類 土 焼物(土器類)

南方・後遺跡Ⅱ 水田層土層図 (東側・ベルト)

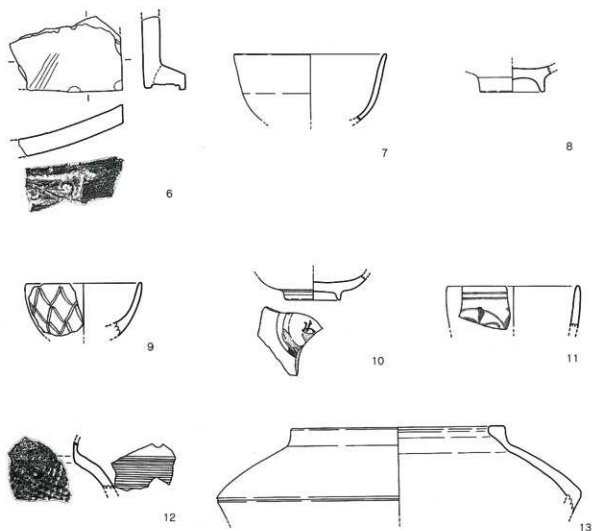


1. 土層 1.075/2 磁器類
2. 敷層 1.075/3 磁器類
3. 敷層 1.075/4 磁器類(土器類)
4. 敷層 2.075/1 磁器類(土器類)
5. 敷層 2.075/4 磁器類 土 焼物(土器類)
6. 敷層 2.075/5 磁器類 土 焼物(土器類)
7. 土層 1.075/1 中中層 土 焼物(土器類)
8. 土層 1.075/2 中中層 土 焼物(土器類)
9. 土層 1.075/3 中中層 土 焼物(土器類)
10. 土層 2.075/4 中中層 土 焼物(土器類)
11. 土層 1.075/1 磁器類 土 焼物(土器類)

第48図 2次調査区S-1000, S-137



第49図 S-3出土遺物



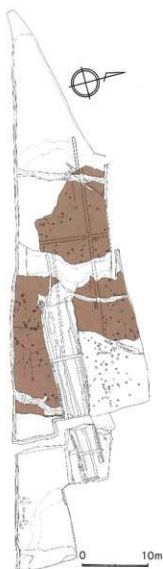
第50図 2次調査区S-1000出土遺物

6は近世の軒平瓦で、唐草文がある。7と8は京焼系碗、9と10は染付碗、11は陶胎染付、12は唐津焼、13は瓦質の壺である。

3) 水田

第27層の水田 (第51図)

南壁土層27層はプラントオパール分析(P44参照)によって水田層である可能性が高いことがわかった。土色は黒色で、一見すると水田耕作土らしくない土壌であった。この27層は調査区南壁の土層断面図からわかるように、東はS-133から、西はS-131の西側にある礫の堆積によって高くなった部分にかけて伸びている。北側の調査区内部の状況は図51では第27層の下面レベルを示している。また、調査区内のラインは同一レベルで見た時に第27層とその下の層(34層)との境が線として追えたものを示している。これによると、最も高いのは調査区南東側で、西に向けて徐々に下りながら、一方では北側で急激に下っているのがわかる。調査では、遺構検出を優先させたため、第27層の下面まで掘り下げたことにより、第27層の水田がどのような構造になっていたのかについては残念ながらわからない。しかし、S-65やS-4など、第27層と考えられる黒色土が堆積していた溝は、S-133にはほぼ平行し、かつ水田の境と考えられるラインに近いところで検出されていることを考えると、第27層の水田に伴う水路であった可能性が高い。

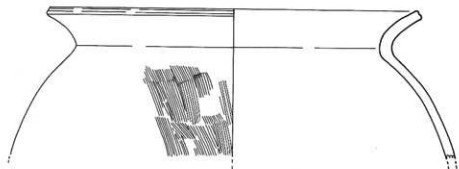


第51図 2次調査区27層(水田層)の広がり

また、27層の東を限るS-133は、27層の水田に水を供給した基幹水路であった可能性が高い。途中で水口と思われる溝が80cmほど枝分かれしている。

このような状況から、段丘上から北西側に向かってやや下がる緩斜面にS-133を水路として小区画水田が展開していたものと考えられる。

出土遺物は第52図14である。外面ハケ調整、内面ナデ調整で、やや外反しながら口縁部が開き、胴部が球形になる弥生土器である。時期は弥生時代後期後半である。他にも小破片で弥生土器がある。

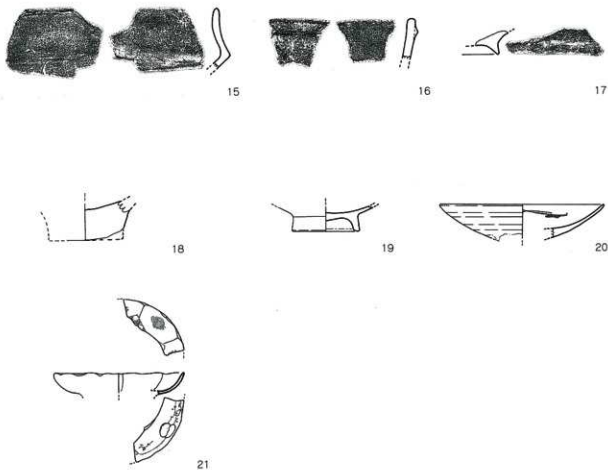


第52図 2次調査区27層出土遺物

14

4) その他の出土遺物

南壁土層 22 層に相当する土層から近世の陶磁器が出土している。第 52 図 15 から 21 である。15 から 17 は縄文晩期後半の土器、18 は弥生土器甕の底部、19 は京焼系碗、20 と 21 は磁器染付である。



第53図 2次調査区その他の出土遺物

4 自然科学分析

1) 植物珪酸体 (プラント・オパール) 分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO₂) が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山, 2000)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である (藤原・杉山, 1984)。

2. 試料

分析試料は、2次調査第Ⅰ区南壁の11層 (試料①)、22層 (試料②)、27層 (試料③)、34層 (試料⑥)、39層 (試料⑧) から採取された計5点である (第40図参照)。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図 (第52図) に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法 (藤原, 1976) を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加 (0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重 (1.0と仮定) と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10-5g) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる (杉山, 2000)。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率およびメダケ率 (メダケ属とササ属の比率) を求めた。

4. 分析結果

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および第52図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

[イネ科]

イネ、ムギ類 (穎の表皮細胞)、キビ族型、ヨシ属、シバ属、ススキ属型 (おもにススキ属)、ウシクサ族A (チガヤ属など)

[イネ科-タケ亜科]

メダケ節型 (メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型 (おもにメダケ属ネザサ節)、ミヤコザサ節型 (ササ属ミヤコザサ節など)、未分類等

[イネ科-その他]

表皮毛起源、棒状珪酸体 (おもに結合組織細胞由来)、未分類等

[樹木]

ブナ科 (シイ属)、ブナ科 (アカガシ亜属)、クスノキ科、多角形板状 (ブナ科コナラ属など)、その他

5. 考察

(1) 稲作跡の検討

水田跡 (稲作跡) の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体 (プラント・オパール) が試料 1g あたり 5,000 個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している (杉山, 2000)。なお、密度が 3,000 個/g 程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を 3,000 個/g として検討を行った。

分析の結果、11 層 (試料①)、22 層 (試料②)、27 層 (試料③) の 3 層準からイネが検出された。このうち、11 層 (試料①) と 22 層 (試料②) では密度が 5,600 個/g および 6,100 個/g と高い値であり、27 層 (試料③) でも 4,700 個/g と比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

(2) イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型 (ヒエが含まれる)、エノコログサ属型 (アワが含まれる)、キビ属型 (キビが含まれる)、ジュズダマ属 (ハトムギが含まれる)、オヒシバ属 (シコクビエが含まれる)、モロコシ属型、トウモロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはムギ類が検出された。

ムギ類 (穎の表皮細胞) は、11 層 (試料①) から検出された。密度は 700 個/g と低い値であるが、穎 (籾殻) が栽培地に残される確率は低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺でムギ類が栽培されていた可能性が考えられる。

(3) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

上記以外の分類群では、全体的にネザサ節型が多く検出され、ヨシ属、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族 A、メダケ節型、ミヤコザサ節型、および樹木 (照葉樹) のブナ科 (シイ属)、クスノキ科なども認められた。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねネザサ節型が優勢であり、部分的にヨシ属も多くなっている。

以上の結果から、各層準の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して 27 層の時期に水田稲作が開始されたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属 (おもにネザサ節) をはじめススキ属やチガヤ属、キビ族などのイネ科草本類が生育し、遺跡周辺にはシイ属、クスノキ科などの照葉樹林が分布していたと推定される。

6. まとめ

植物珪酸体 (プラント・オパール) 分析の結果、11 層、22 層、27 層ではイネが多量に検出され、それぞれ稲作が行われていた可能性が高いと判断された。また、11 層ではムギ類が栽培されていた可能性も認められた。

各層準の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して 27 層の時期に水田稲作が開始されたと推定される。また、周辺の比較的乾燥したところにはメダケ属 (おもにネザサ節) をはじめススキ属やチガヤ属、キビ族などのイネ科草本類が生育し、遺跡周辺にはシイ属、クスノキ科などの照葉樹林が分布していたと推定される。

文献

杉山真二・藤原宏志 (1986) 機微細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定 - 古環境推定の基礎資料として -。考古学と自然科学, 19, p.69-84.

杉山真二 (1999) 植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史. 第四紀研究, 38(2), p.109-123.

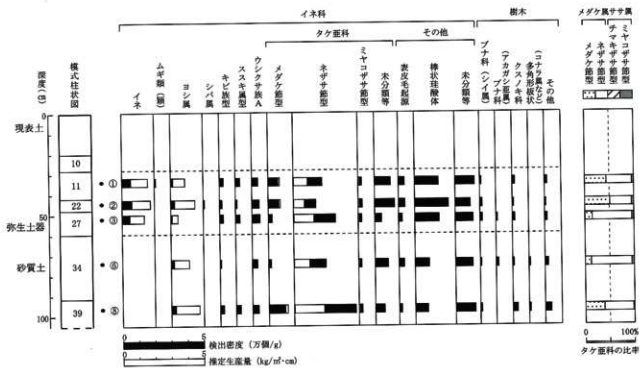
杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オパール). 考古学と植物学, 同成社, p.189-213.

藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) - 数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法 -. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.

藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) - プラント・オパール分析による水田址の探索 -. 考古学と自然科学, 17, p.73-85.

表3 2次調査区における植物珪酸体分析結果

分類群	地点・試料 学名	2次調査1区				
		①	②	③	④	⑤
イネ科	Gramineae					
イネ	<i>Oryza sativa</i>	55	61	47		
ムギ類 (穎の表皮細胞)	<i>Hordeum-Triticum</i> (husk Phytolith)	7				
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	14	24	7	18	28
シバ属	<i>Zoysia</i>		6			
キビ族型	Panicaceae type	21	12	20	6	21
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	21	6	20		21
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	35	43	47	31	35
タケ亜科	Bambusoideae					
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	62	67	20	12	104
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	180	140	263	201	388
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	21	24	20	18	21
未分類等	Others	97	122	40	79	55
その他のイネ科	Others					
表皮毛起源	Husk hair origin	35	37	20	31	14
棒状珪酸体	Rodshaped	145	207	148	85	76
未分類等	Others	118	92	108	104	118
樹木起源	Arboreal					
ブナ科 (シイ属)	<i>Castanopsis</i>	7	12	14	6	7
ブナ科 (アカガシ亜属)	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>			7	12	
クスノキ科	Lauraceae	14	6	14	6	28
多角形板状 (コナラ属など)	Polygonal plate shaped (<i>Quercus</i> etc.)				6	7
その他	Others	14	6	14	18	35
植物珪酸体総数	Total	844	866	808	634	955
おもな分類群の推定生産量 (単位: kg/m ² ・cm) : 試料の仮比重を 1.0 と仮定して算出						
イネ	<i>Oryza sativa</i>	1.6	1.8	1.4		
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	0.9	1.5	0.4	1.2	1.7
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.3	0.1	0.3		0.3
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	0.7	0.8	0.2	0.1	1.2
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	0.9	0.7	1.3	1.0	1.9
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
タケ亜科の比率 (%)						
メダケ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nipponocalamus</i>	44	51	15	12	39
ネザサ節型	<i>Pleioblastus</i> sect. <i>Nezasa</i>	52	44	81	83	60
ナマキザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Sasa</i> etc.					
ミヤコザサ節型	<i>Sasa</i> sect. <i>Crassinodi</i>	4	5	4	5	2
メダケ率	Medake ratio	96	95	96	95	98

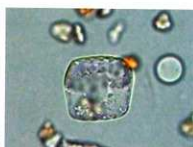


第54図 2次調査I区における植物珪酸体分析結果

雄方後遺跡の植物珪酸体 (プラント・オパール)



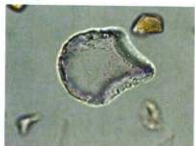
イネ
試料③



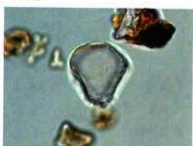
イネ (側面)
試料①



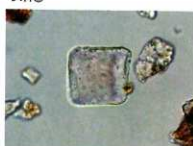
キビ族型
試料③



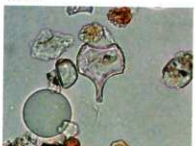
ヨシ属
試料⑥



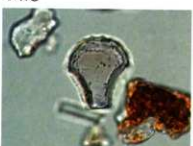
ススキ属型
試料⑧



ウシクサ族A
試料①



シバ属型
試料②



メダケ節型
試料③



ネザサ節型
試料③



ネザサ節型
試料③



ミヤコザサ節型
試料④



表皮毛起源
試料②



棒状珪酸体
試料②



ブナ科 (シイ属)
試料④



クスノキ科
試料②

50 μm

2) 花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

分析試料は、2次調査I区南壁(第40図参照)の11層(試料①)、22層(試料②)、27層(試料③、④)、34層(試料⑤~⑦)、39層(試料⑧)について採取された計8点である。

3. 方法

花粉の分離抽出は、中村(1967)の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 試料から1cm³を秤量
- 2) 0.5%リン酸三ナトリウム(12水)溶液を加えて15分間湯煎
- 3) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈殿法で砂粒を除去
- 4) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 5) 水洗処理の後、水酢酸によって脱水し、アセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1のエルドマン氏液を加えて1分間湯煎)を施す
- 6) 再び水酢酸を加えて水洗処理
- 7) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。

4. 結果

(1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉5、シダ植物胞子2形態の計8である。分析結果を表1に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。

[樹木花粉と草本花粉を含むもの]

クワ科-イラクサ科

[草本花粉]

イネ科、カヤツリグサ科、アブラナ科、キク亜科、ヨモギ属

[シダ植物胞子]

単条溝胞子、三条溝胞子

(2) 花粉群集の特徴

下位の39層(試料⑧)では、樹木・草本を含むクワ科-イラクサ科、シダ植物単条溝胞子が検出されたが、いずれも少量である。34層(試料⑤~⑦)では花粉が検出されなかった。27層(試料③)ではクワ科-イラクサ科、草本花粉のヨモギ属、イネ科、キク亜科、シダ植物三条溝胞子、22層(試料②)ではクワ科-イラクサ科、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、シダ植物三条溝胞子、11層(試料①)ではイネ科、アブラナ科が検出さ

れたが、いずれも少量である。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

花粉がほとんど検出されないことから植生や環境の推定は困難であるが、上位の11層～27層で認められたイネ科、ヨモギ属、アブラナ科は耕地雑草ないし人里植物であり、周囲にはこれらの草本類が生育していた可能性が考えられる。

花粉が検出されない原因としては、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で花粉などの有機質遺体が分解されたこと、土層の堆積速度が速かったこと、および水流や粒径による淘汰・選別を受けたことなどが考えられる。

文献

金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.

島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花形形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.

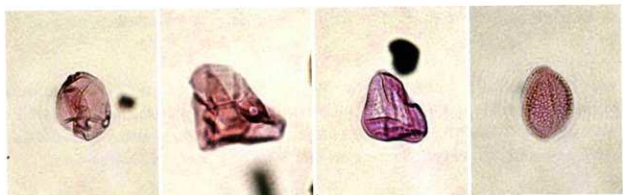
中村純 (1967) 花粉分析. 古今書院, p.82-110.

中村純 (1980) 日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.

表4 2次調査区における花粉分析結果

分類群		2次調査1区							
学名	和名	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉								
Moraceae-Urticaceae	クワ科・イラクサ科		1	1					1
Nonarboreal pollen	草本花粉								
Gramineae	イネ科	1	2	2					
Cyperaceae	カヤツリグサ科		1						
Cruciferae	アブラナ科	1							
Asteroidae	キタ重科			1					
Artemisia	ヨモギ属		1	8					
Fern spore	シダ植物胞子								
Monoletate type spore	単条溝胞子								
Trilate type spore	三条溝胞子		1	1					2
Arboreal pollen	樹木花粉	0	0	0	0	0	0	0	0
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	1	1	0	0	0	0	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	2	4	11	0	0	0	0	0
Total pollen	花粉総数	2	5	12	0	0	0	0	1
Pollen frequencies of 1cm ³	試料 1cm ³ 中の花粉密度	12	30	72	0	0	0	0	6
Unknown pollen	未同定花粉	0	0	0	0	0	0	0	0
Fern spore	シダ植物胞子	0	1	1	0	0	0	0	2
Helminth eggs	寄生虫卵	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)
Digestion remains	明らかな消化残渣	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)	(+)
Charcoal fragments	微細炭化物			(+)	(+)				

雄方後遺跡の花粉・胞子

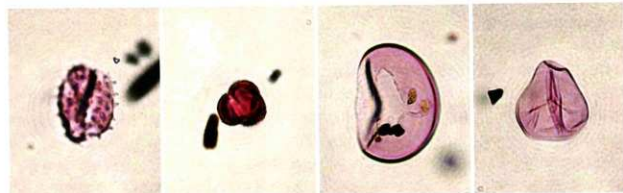


1 クワ科?イラクサ科

2 イネ科

3 カヤツリグサ科

4 アブラナ科



5 キク亜科

6 ヨモギ属

7 シダ植物単条溝胞子

8 シダ植物三条溝胞子

— 10 μm

5 小結

土層の観察や出土遺物、遺構相互の関係などを検討した結果、雄方後遺跡2次調査区では、その変遷が大きく5期に分けて理解できることがわかった。それぞれをステージⅠからⅤとしてその状況を述べていきたい。

ステージⅠ

今回の調査で遺構検出面とした南壁土層34層は、調査区の全面に広がっていた。34層は砂層で、中に縄文晩期の土器片が包含されていた。そのことから、34層の河川堆積は少なくとも縄文晩期以降のものでとすることができる。後述のステージⅢが弥生時代後期と考えられるので、ステージⅠは縄文時代晩期から弥生時代後期までの間のどこかと考えられる。縄文晩期の遺物は調査区南側、すなわち上流側からの流れ込みであろう。

ステージⅡ

南壁土層34層を切り込んで、且つ南壁土層27層に覆われているS-131が該当する。S-131は断面形状から水路と考えられるが、単独での存在のため明確な位置づけは不明である。S-131からは時期を示すような遺物の出土はなく時期は不明である。

ステージⅢ

調査区の約3分の2に広がる南壁土層27層の形成された段階である。プラントオパール分析で水田層とされた土層(試料③)で、中から弥生時代後期の土器片が出土する。よってこのステージの時期は弥生時代後期以降近世前期以前であるが、古墳時代から中世にかけての遺物は全く出土しないことから、水田の形成時期は弥生時代後期としてよいと考える。この水田層の東端にはS-133がある。S-133に接する手前1m程のところまで27層は約10cm高くなっている。上部が後世の水田層で削平された可能性が高いと考えと、S-133に接する高まりは畦畔であった可能性がある。つまり、このステージでは、水路であるS-133から西側に水田が形成されていたとすることができる。

ステージⅣ

弥生時代後期の水田層と考えられる南壁土層27層を切っているS-3、S-3と繋がりのあるS-132、S-64、S-136は同時期に機能していたと考えられる。S-3は水路と考えられ、掘り直しが認められる。S-3に接するS-132は、南から流れてきたS-3の水を引き込む様に作られ、そこからS-64とS-137の水路を引いていた。また、S-135とS-136、S-1000は水場でもあるS-132に向かって一直線に伸びる道跡である。この景観は、江戸時代中期の享保年間(18世紀前半)の水路掘削によって失われる以前のものであろう。これらがいっつまで遡るのかについては中世以前の遺物が無く、不明とせざるを得ない。

ステージⅤ

前時期の各遺構が埋まり、その上が南壁土層22層の水田(試料②)によって調査区の約半分が覆われた段階である。一段低い道跡(S-1000)も水田化されているのが確認されたが、残りの部分も同様に水田になったと考えられる。調査区の東側は西側に比べて約30cmほど高いため、削平されたと考えられ、水田層は確認されなかった。時期は、享保井路が完成した後である。

雄方後遺跡2次調査区は、現在の田原集落の西の外れの外側に位置している。遺跡の内容から見ても、建物の痕跡は無い代わりに、水場と考えられる遺構やそこに行くための道、水場から水を取る水路など、村外れの情景を彷彿とさせる遺構があるなど、田原集落との強い関連性が想定される。明確な時期は遺物から押さえることは出来なかったが、道であるS-1000の埋まったあとに水田となった耕作土中からは18世紀の遺物が出土しており、少なくとも18世紀には水場に行くための道は機能していなかった。このことは、江戸時代中期の開削になる享保井路の開通と関連があるものと考えられる。つまり、享保井路の開削によって山間から流れ下る水に頼る灌漑が不要となり、水場や水路が廃れたと考えられるのである。

そう考えると、今回発掘調査で検出されたステージⅣの遺構群は、享保井路の開通による景観の大幅な改変前

の景観を現出させたということになる。

それ以前の状況についてはステージⅠからⅢとして整理したが、いずれも出土遺物が少なく、ステージⅢが弥生時代後期と想定される他は時期の特定や存続期間、性格などは判然としない部分が多い。しかし、この調査地点が南側の丘陵からなだらかに広がる平野地の一端であることから、この地点に複数回にわたって水路が作られ、一段低い河岸段丘に展開していたであろう水田に水を供給する役割を担っていたことがわかる。それが弥生時代まで遡るものであるかどうかは、今後の周辺部の調査を待つしかない。

第3節 3次調査区



第55図 3次調査区遺構配置図(3/40)

1 調査の概要

3次調査区は1～3次調査区の東端にあたる。調査は東区と西区に分けて切り返しを行い実施した。

南側に中世以降の集落が広がる北限付近にあり、この地点から北側は急激に地形が落ち、水田が広がる。現況は比較的狭い水田であるが、水田造作時に削平を行っており、遺構の中には、削平が著しいために、失われてしまったものも存在すると考えられる。

調査の結果、多数の柱穴のほか、土坑や溝、井戸などの遺構とともに少数だが遺物が確認された(第55図)。溝には、水田耕作に伴う暗渠排水等、近年まで機能していたものも存在するが、概ね、中世以前のものともてよからう。これらについて、以下で詳細を述べる。

2 遺構と遺物

1) 井戸

井戸は2基検出できた。木製の井筒や石組等、井戸と決定づける井戸としての要素は確認できなかったが、形態や湧水の有無等で判断した。

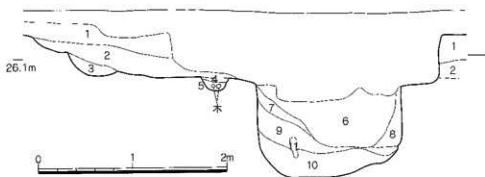
SE010(第55・56・57図、写真図版22)

調査区の西端において検出された径160cm、深さ100cmを測る井戸である。9・10層のように下層に粘質が強い黒色の堆積層が確認でき、この層まで湧水が確認できる。浅棕色土のブロックを含み黒め戻された土と考えられる6層からは数多くの土師質土器の坏皿類が出土している。また、最下層から口禿げ白磁皿が出土しており、この井戸の帰属時期の指標となる。(第56図)

出土遺物は第57図に示した。1は口禿げ白磁皿である。2～6は土師質土器坏であり、7・8は土師質土器小皿である。いずれも底部に回転糸切り痕が確認でき、2・6・7には底部に板状圧痕が確認できる。

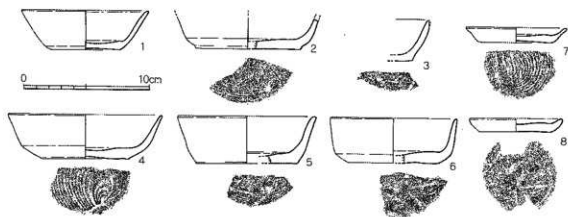
SE015(第55・58・59図、写真図版23～25)

調査区の西端において検出された径420～450cm、深さ220cmを測る井戸である。逆フラスコ状に細くなり、最下部で径70cm、深さ30の土坑状を呈する。ここに曲物を据えていたと考えられる。掘形の中段の位置に木杭を打ち、丸太や板材を固定して水汲みの足場施設としている。堆積層は7層を境に上下層で大きく様相が異なる。7層は酸化鉄の沈着層であり、その上層は酸化状態、下層は還元状態である。1～9層は地山の小ブロック



1 7.5YR4/1	褐色土	粘性强	粘り強し	水田の耕作土か?	全体が鉄分の沈着が認められる
2 7.5YR5/1	褐色土	粘性强	粘り強し	同層	
3 10YR3/1	黄褐色土	粘性强	粘り強し	SD003の堆土	全体に鉄分の沈着 階層の上端の位置
4 10YR6/1	褐色土	粘性强	粘り強し	全体に鉄分の沈着	
5 10YR5/1	褐色土	粘性强	粘り強し	SD008の堆土	本層を境に泥の形で並べて埋められたりしないようにしている
6 2.5YR2/1	黄褐色土	粘性强	粘り強し	浅棕色土ブロックをまばらに含む	
7 10YR2/1	黄褐色土	粘性强	粘り強し	全体的に浅棕色土ブロックを含む	比較的粘り強い母地が湧水
8 10YR8/2	灰内色土	粘性强	粘り強し	高棕色土の堆土層	
9 10YR2/1	黄褐色土	粘性强	粘り強し	この層まで人が掘っていた可能性?	下層に形状に準じた沈着がみられる
10 10YR1.7/1	黄褐色土	粘性强	粘り強し	黄褐色土の堆土層	
11 10YR7/6	黄褐色土ブロック	粘性强	粘り強し	黄褐色土ブロック、黄褐色土ブロック(鉄分)も層の下層に含む、口禿白磁	

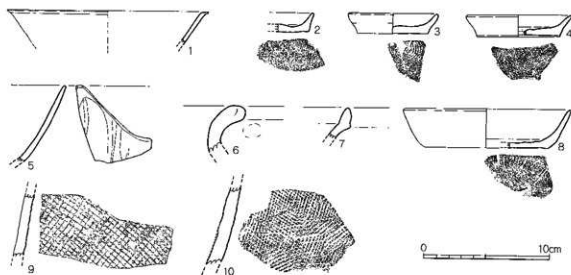
第56図 3次調査区SE010断面図(1/40)



第57図 3次調査区SE010出土遺物(1/3)

が混入し、人為的に埋め戻された可能性が高い。10層以下は均質な粘質土であり、竹・アシ・ヨシ等の植物片が多く確認できる。なお、埋土中には上下層は関係なく、人頭大からひとかかえもある礫が多く混入している。埋土中には曲げ物の底板等の木片や土器片が出土している。

出土遺物は第58図に示した。5が下層、1・9が中層から出土したほかは、すべて上層に含まれる遺物である。1は白磁碗である。2～4は土師質土器小皿であり、8は土師質土器杯である。いずれも底部に回転糸切り痕が確認できる。5は龍泉窯系青磁碗であり、外面に鎗進弁がみえる。6は瓦質土器甕の口縁片である。頸部から口縁を丸く外反させ口唇部も丸く仕上げる。備前焼であろうか。7は東韓系中世須恵器の片口鉢の口縁である。9は瓦質土器甕片であり、外面に細かい格子目のタタキが認められる。内面の調整は剥離して不明である。10は土師質土器甕片である。外面に平行タタキが認められるが、内面の調整は剥離して不明である。



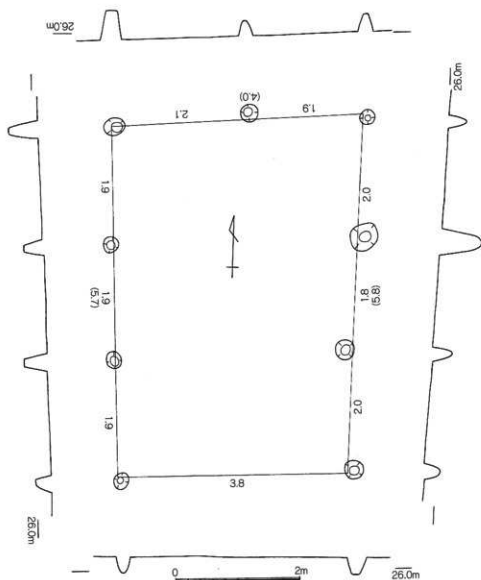
第58図 3次調査区SE015出土遺物(1/3)

2) 掘立柱建物

調査区全域から検出された150基をこえるピットから、掘立柱建物跡や構列が復元できるものがみられる。掘立柱建物跡は確実なものとして3基が確認できた。出土遺物がみられず、帰属時期が不明であるが、周辺遺構や包含層中から出土する遺物から中世に営まれたものであると考えられる。

SB016(第60図、写真図版21)

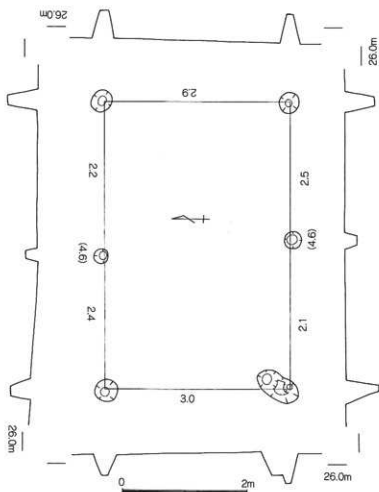
調査区の中央に位置する掘立柱建物であり、規模は梁間3間(5.7~5.8m)、桁行2間(3.8~4.0m)と、南北に長い長方形を呈し、身舎面積は22.4㎡を測る。先後関係は明らかではないが、SB017と切り合いをもつ。検出面の柱穴の大きさは比較的小さく浅いものが多い。南の桁行には中央に柱を欠き、桁行が3.8mと、北側に比較すればやや狭い。



第60図 3次調査区SB016(1/60)

SB017(第61図、写真図版21)

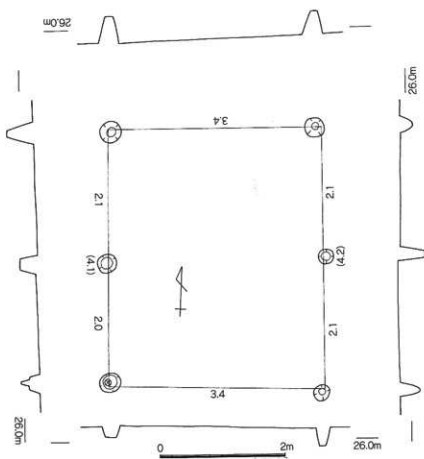
調査区の中央に位置する掘立柱建物であり、規模は梁間2間(4.6m)、桁行1間(2.9~3.0m)と、東西に長い長方形を呈し、身舎面積は13.6㎡を測る。先後関係は明らかではないが、SB016およびSB018と切り合いをもつ。検出面の柱穴の大きさは比較的小さく浅いが、各隅の柱穴は深さを深くしている。



第61図 3次調査区SB017(1/60)

SB018(第62図、写真図版21)

調査区の中央に位置する掘立柱建物であり、規模は梁間2間(4.1~4.2m)、桁行1間(3.4m)と、東西に長い長方形を呈し、身舎面積は14.1㎡を測る。先後関係は明らかではないが、SB017と切り合いをもつ。検出面の柱穴の大きさは比較的小さく浅い。



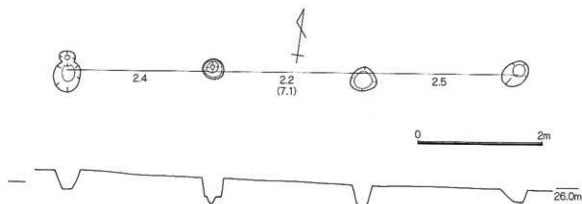
第62図 3次調査区SB018(1/60)

3) 横列

調査区全域から検出された150基をこえるピットから、掘立柱建物跡や横列が復元できるものがみられる。横列は确实なものとして3列が確認できたが、出土遺物がみられず、帰属時期が不明であるが、周辺遺構や包含層中から出土する遺物から中世に営まれたものであると考えられる。

SA019(第63図、写真図版21)

調査区中央のSB016およびSA020の北に位置する横列であり、4基のピット列(7.1m)からなる。柱穴規模は小さく検出面の柱穴径は20cmをわずかにこえる程度である。



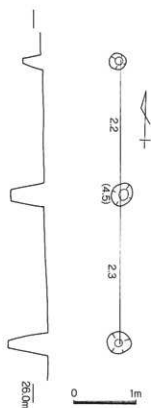
第63図 3次調査区SA019(1/60)

SA020(第64図、写真図版21)

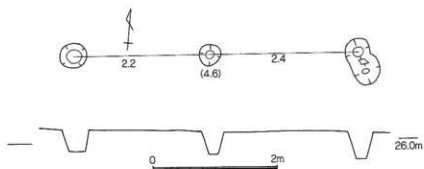
調査区中央のSB016の西に位置する横列であり、ほぼ南北方向に並ぶ3基のピット列(4.5m)からなる。柱穴規模は小さく検出面の柱穴径は20cmをわずかにこえる程度である。地形が南西から北東に傾斜するため、柱穴の深さは南の方が深い。

SA021(第65図、写真図版21)

調査区中央に位置する横列であり、SB016と切り合いをもつ。3基のピット列(4.6m)からなる。柱穴規模は小さく検出面の柱穴径は20cmをわずかにこえる程度である。



第64図 3次調査区SA020(1/60)



第65図 3次調査区SA021(1/60)

4) ビット

調査区全域から検出された150基をこえるビットが検出できた。中には、掘立柱建物跡や構列が復元できるものもみられるが、復元に至らないものがほとんどである。これらのビット群は周辺遺構から出土する遺物から中世に営まれたものであると考えられる。

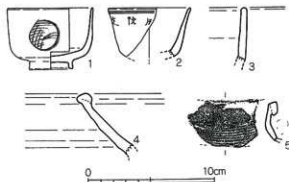
出土遺物は第66図に示した。1はSP002、2はSP007から出土したものである。1は龍泉窯系統であり、外面に鎊蓮弁がみえる。2は土師質土器坏であり、底部に回転糸切り痕が確認できる。



第66図 3次調査区ビット
出土遺物(1/3)

5) 遺構外出土遺物

出土遺物は第67図に示した。1は染付小杯であり、外面に丸い輪郭内にススキ状の染付がみえる。2は関西系磁器小杯であり、口縁下外面に2条の圈線が、また、圈線下には文字を配している。幕末頃のものであろうか。3は磁器碗であろうか。器形が直立して口縁に至る形態をもつ。4は瓦質土器火鉢である。5は土師質の土人形の破片である。これら包含層中から出土した遺物はいずれも近世以降のものである。



第67図 3次調査区出土遺物(1/3)

表5 3次調査遺物観察表

図取 番号	挿入 番号	写真 図版	遺構名	種類	器形	生産地	法量 (cm) () は復元径			備考
							口径	底径	器高	
57	1	26-1	SE010	白磁	碗	中国				
57	2		SE010	土師質土器	坏		(10.0)	(5.4)	3.2	
57	3		SE010	土師質土器	坏			(8.2)		
57	4		SE010	土師質土器	坏		(12.2)	(7.0)	3.5	
57	5		SE010	土師質土器	坏		(11.0)	(8.0)	3.8	
57	6		SE010	土師質土器	坏		(10.0)	(7.0)	3.5	
57	7		SE010	土師質土器	小皿		8.0	6.0	1.2	
57	8		SE010	土師質土器	小皿		7.5	5.5	1.1	
58	1	26-2	SE015	白磁	碗		(16.0)			
58	2		SE015	土師質土器	小皿				1.5	
58	3		SE015	土師質土器	小皿		(7.0)	(5.5)	1.6	
58	4		SE015	土師質土器	小皿		(8.5)	(6.5)	1.7	
58	5	26-3	SE015	青磁	碗	龍泉窟				
58	6	26-4	SE015	陶器	壺	樽原?				
58	7	26-5	SE015	中世須恵器	片口鉢	東郷系				
58	8		SE015	土師質土器	坏		(13.4)	(10.0)	3.5	
58	9	26-6	SE015	中世須恵器	甕?	亀山産				
58	10	26-7	SE015	土師質土器	甕?					
66	1	26-8	SP002	青磁	碗	龍泉窟				
66	2		SP007	土師質土器	坏				2.8	
67	1	26-9	包含層	染付	小杯		6.8	3.4	4.8	
67	2	26-10	包含層	染付	小杯			(6.5)		
67	3	26-11	包含層	磁器	碗?					
67	4		包含層	瓦質土器	火鉢					
67	5	26-12	包含層	土製品	土人形					

3 小結

今回の発掘調査において、井戸・掘立柱建物・櫛列・ピット・溝などからなる中世以降の良好な遺跡の広がりが確認できた。まず、溝に関しては出土遺物から明確な時期が語れる遺構はみられないが、SD008のように溝中に木を埋め込み、暗渠排水としての機能が想定できるものもみられるため、近世に水田化されて以降の用排水に伴う遺構であることが考えられる。そのため、中世に限定できる遺構は井戸・掘立柱建物・櫛列・ピットであることがわかる。

掘立柱建物・櫛列・ピット等の遺構群が広がる範囲が調査区中央部に限られるが、本来、北西から南東に下る緩斜面に遺構が営まれていたものを、近世以降の水田化により、削平したため、掘立柱建物・櫛列・ピット等の遺構群が広がる範囲の両側にも本来は遺構が存在していたものの、削平されてしまった可能性も残る。

まず、主要な遺構として挙げられるのが、2基の井戸であろう。この両者は、同時存在であるかどうかは明確ではないが、出土遺物から13世紀後半～14世紀前葉に営まれたものであろう。出土遺物からSE015がSE010に先行するものと思える。SE010内の中央付近からは比較的多くの土師質土器坏の破片のみが出土しており、井戸廃棄の祭祀行為に伴うものであるかも知れない。また、SE015は逆フラスコ状の形態を呈し、最下層は円形を呈するため、曲物状の井戸枠を据えていた可能性が高い。また、丸太や板材を組み、水汲みのための足場を設けている点は興味深い。

掘立柱建物・櫛列・ピット等の遺構群は明確に時期がおさえられる遺物はみられない。しかし、断片的にみられる遺物や包含層から出土した遺物からみれば、井戸と同じく13世紀後半～14世紀前葉のものである可能性が高いと考えられる。掘立柱建物が3棟、櫛列が3列、確認できたが、切り合い等から2～3時期の群であることが想定できる。なお、掘立柱建物は柱穴の規模も小さく、面積も13～22㎡と、小さい。主屋か副屋かは周辺部も含めた遺構群との関係で語らなければならないが、主屋であれば建物としては小規模であり、集落構成の中では下層の生活空間であるということが出来る。

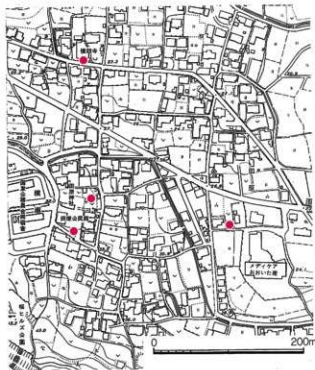
第4章 総括

雄方後遺跡は大分川右岸の沖積平野を見下ろす緩斜面上に位置する中世～近世の集落遺跡である。1～3次の調査区は国道210号より南に広がる集落が位置する台地上から沖積平野を望む緑辺部にあたる。西からみれば、2次調査区では近世の水田地が、1次調査区では戦国末～近世初頭の建物群が、3次調査区では鎌倉時代後期～南北朝時代前半の建物群がそれぞれ確認できている。

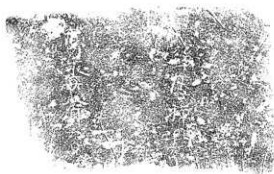
田原集落を概観した場合、国道210号の北側で集落内を走る旧国道は、台地を下りた地点であり、歴史的な踏査を行っても、さほど古い様相はなく、比較的新しい集落形成にもとづく主要幹線であることが想定できる。旧国道の北側の沖積平野内には「川原」地名が多くみられ、大分川の氾濫原であったことが推測できよう。

これに対し、国道210号以南の台地上の集落は、集落内を走る古道をはじめ、集落景観が古く、この地点が中世集落の中心地であったことが考えられる。幸い、集落内には石塔群がみられる個所が3か所ある。以下ではそれぞれについて、紹介したい。

まず、田原神社周辺である。田原神社はかつては熊野社と呼ばれ、明治39年(1906)に字中津留の天神社を合祀して田原神社と改称したと伝えられている。この田原神社境内には慶生庵とよばれる観音堂が存在し、観音堂周辺には南北朝～戦国時代の五輪塔・板碑・宝塔・無縫塔等の石塔が残されている。この中に大友親治の墓と伝えられる石塔が存在すると言われているが、その特定はできない。また、戦国期のものと思える無縫塔の竿には「桂槐俊昌大師」の戒名が刻まれている。田原神社境内にも、南北朝～戦国時代の板碑・五輪塔・一石五輪塔が散在して見えることから、同時代に田原集落の構成員が集う宗教空間であったことが考えられる。また、田原神社から200m東方に南北朝期のものと考えられる層塔の部材や戦国期の五輪塔・一石五輪塔が残されている。この地点は「ホウキョウジ」と呼ばれ、往古に寺院が存在していたという伝承をもつ。このほかにも、旧国道に面した横超寺には、旧在地が伝えられていないが、室町～戦国期の五輪塔・一石五輪塔の部材が集められている。ひとつの五輪塔水輪には「浄忍禅門 應永廿八月二日」の銘がみられ、応永20年(1413)に「浄忍禅門」のため逆修あるいは追修のために建塔したことがわかる。



第68図 大分市大字田原地区における歴史的環境



應永廿八月二日

淨忍禪門



第69図 大分市田原横起寺所在石塔部材

このように、14世紀から中世を通じて石塔の存在が認められることや、その由緒が明らかでないものの田原神社（熊野社）、慶生庵、ホウキョウジなどの宗教施設が存在していたことから、当該期に集村化し一定の集落として機能していたであろうことは、現在の地上観察でも読み取れる。

今回の発掘調査において、3次調査区から13世紀に遡る生活空間の諸遺構が発見され、石塔の造営期を遡る時代から、集落としての営みははじまっていたことが確認できた。ただ、全国的にみても、石塔が13世紀中葉の文永・弘安の頃に製作が定着し始めるものの、その資料数はきわめて少ないため、田原地区においても集落が形成されはじめているものの、石塔の造立はなされなかったことになる。鎌倉～南北朝期には田原神社（熊野社）や慶生庵が集落の核としてその東側部分集落が展開していくことが推測できるが、3次調査区は安定した台地上からすれば、大分川の旧氾濫原に下りる地形変換点であり、当時からすれば集落の縁辺であることがわかる。3次調査区にみられる生活単位の建物配置は確認できていないものの、掘立柱建物の規模としてはすべて小さい。そのため、集落の構成員としては必ずしも上位にある家とはいえないことがわかる。しかしながら、一般的に南北朝から集村化が始まり、それ以前の平安～鎌倉期には散村景観を呈するとされているが、田原地区においてすでに集村化の走りが確認できたことは重要な成果であろう。

鎌倉期にはじまる集落は継続して現在まで続いているが、今回の発掘調査における1次調査区からは、戦国期末～近世初頭の生活空間の諸遺構が発見された。3次調査区と同様に大分川の旧氾濫原に下りる地形変換点であり、中世期の集落の縁辺であることがわかるが、ここでは戦国時代中期以前の遺構群は確認できていない。そのため集落の拡大がこの地に及んだのは、戦国期末～近世初頭であることがわかり、また、この地においても、掘立柱建物の規模としてはすべて小さいため、集落の構成員としては必ずしも上位にある家とはいえないことがわかる。このように、時期ごとの集落の展開がわかり興味深い。

また、今回の発掘調査における2次調査区は、1・3次調査区からみて、より比高差が低く、また、集落の中心からは外れる。2次調査区からは帰属時期を明確にはできないものの、水田や低湿地の遺構群が確認でき、集落が営まれた台地縁辺の土地利用の様子がよくわかる。

当該地の調査が今後進むことにより、地下に埋もれた遺跡の実態が明らかになり、現在に残る土地景観や石造物などの遺物との関連性も含めて中世集落の実態というものが、さらに解明されてくることであろうし、それを期待したい。